

Talk Me Parallel
The Reason why You' re There

4人のハロウィンストーリー

紫桐子

Talk Me Parallel
The Reason why You' re There

4人のハロウインストーリー

★フォント提供★
海沿いのワグウ邸！
<http://calligra-tei.oops.jp/>
★表紙写真提供★
Encycloreorder
<http://encyclorecorder.jp/>

人物紹介

【菖蒲丸（あやめまる）】

本名はライリス・エイズ・サリーフェン。銀髪、金色の瞳。長身瘦躯のこれ以上はない美青年。魔皇天界の大貴族、サリーフェン公爵の比較的近い縁者であり、《人形》調整の腕を認められ、魔皇より侯爵の位を拝領している。

基本的には、日本国蓮花市で法により規制されている《人形》制作に携わっており、《人形》の最終調整を担当する《調教師》を生業としている。

母親から受け継いだ生花店サイレント・グリーンを経営しているが、本人のフラワーアレンジの腕は壊滅的である。

ちなみに、菖蒲丸というのは彼が仕事上使っている屋号であるが、彼が周囲の限られた人々にしか本名を知らせていないため、人気がない場所——例えば、客のいないサイレントグリーン店内や、居住部分、菖蒲丸の知り合いの家などでは菖蒲丸を用いるように周囲に言っている。

長年の相棒である、《人形師》都丸桂馬ですら菖蒲丸の正式な本名を知らない。

「嘘は嫌いだから嘘は吐かねエ。だが、煙に巻いて誤魔化すのは悪ィこっちゃねエ」と嘯く。

【春原 美桜（はるはら・みお）】

生花店サイレント・グリーン中央大通り店店長。

カッコイイというよりも、可愛らしいという表現が的確な顔立ち。小柄で華奢。頭の上の方で前髪を結っているのがトレードマーク。

仕事は出来る。事実、結婚式などの会場装花、ブーケなどは非常に評判がいい。蓮花市のタウン誌が結婚式場の特集をしたとき、会場装花・ブーケの見本を作ったほど。

しかし、普段の本人はどこかしら子供っぽく、お菓子類が大好き。

どこに出かけるにも、家事をするにも、なぜか店のエプロンをしている。本人曰く、「冬場はあったかくていいですよ！」だそうだが、夏はどうなのだろう。

家事能力は今一つで、美味いとも不味いともとれない、とても微妙な味の食事しか作れない。

【野々宮 武尊（ののみや・たける）】

特別警察局蓮花支局という、舌を噛みそうな場所に勤務している。

国立魔法学院本校を首席卒業後、特警局予科に入局。そして、蓮花局に配属になった経歴がある。

涼しげな顔立ちで、菖蒲丸のような派手さはないが日本的美男の部類に入るらしい。特警という場所柄、筋肉質の、しっかりとした体つきをしているようだ。

菖蒲丸がサリーフェンの血族と知っており、要注意人物としてマークしている。

菖蒲丸が店にいと、美桜ですら「わア……」と思うほどのあからさまな探りを入れるため、菖蒲丸は毎回、「うわ、面倒なのが来た……」と、うんざり顔で出迎える。

【エイナ】

《人形師》香の囃の蛍、《調教師》裏唐花の手で創られた《人形》。

背は菖蒲丸ほど高くはないが、整った外見の青年。

性格は基本的に明るく、あまり悩みというものもないように見える。

菖蒲丸、美桜、武尊の物語においては不遇な生の末に破壊処分となるが、エイナの物語を追っていった場合、彼は己の罪を悔い、身を処することを選ぶ。

その後、《人形師》揚羽蝶の都丸桂馬と《調教師》菖蒲丸の手でこの世に蘇ることとなった。

蘇る前と変わらぬ姿をしているが、桂馬のPCに繋がっているプリンタの調子がよくなく、髪と目の色が若干違う以外は、以前とまったく変わらない。

新たな生を受けて後は、日本の法が及ばず、魔界法が適用される国立魔法学院蓮花校内に居を定める。

【フェリシア卿】

ベリオス・フェリシウス・フェリシア伯爵。フェリシア一族の家長である。

豪華な金髪にブルーの瞳の美男。魔界において、演劇で蓄財を成した成功者。職業は脚本家、演出家。

趣味よく広い邸宅には、妻の他に多くの《人形》たちが住んでいる。皆、家族であり、フェリシア卿が運営する大劇場の役者であり、オペラ歌手であり、舞台設営のプロである。

【都丸 桂馬（とまる・けいま）】

《人形師》揚羽蝶。菖蒲丸曰く、『当代随一の《人形師》』。

長身の美男だが、少々そそっかしい部分もある。

妻帯者。もうすぐ第1子が産まれる。

【都丸 真琴（とまる・まこと）】

桂馬の妻。

いろいろあったが、桂馬の妻として彼との間の子をお腹の中で育てている。

菖蒲丸が頭が上がらない数少ない人物の1人。

【ルネ】

体長15センチほどの小さな猫型魔法生物——の体を装っているが、喋って基本二足歩行する。

魔法学院に住んでおり、魔法学院内ではいろいろと顔が利くらしい。

【ティリド・ティアード】

特別警察局蓮花支局長。

武尊の上司。切れ者らしい。

【月之宮 夏来（つきのみや・なつき）】

武尊の魔法学院時代からの友人。郷里が同じであったことで仲良くなり、今に至る。
少々病的な印象を与える、一見すると女性にも見える和装の青年。

物語の重要語句

【蓮花市】

日本の東側にある、とある地方都市。

古来から魔皇天界——通称・魔界との交流が深く、居住市民における魔界人の割合が日本を含めた諸外国よりも多い。

【魔皇天界】

日本では略して魔界と呼ばれている異世界。

中世ヨーロッパのような世界であり、信仰しているのは月。

貴族などもいるが、貴族は政治に口を出すことは出来ない。貴族はどちらかというと、特殊職の人々の名誉職的位置にある。だが、身内の叙位などに関してはある程度の発言権を持っている模様。

国は魔皇が直接統治しており、非常に平和である。

【生花店サイレント・グリーン】

菖蒲丸がオーナーの生花店。

公園通り店と中央大通り店の2軒ある。話によっては、蓮花校店の3軒だったりする。

メインで出てくるのは中央大通り店。店長は美桜。

モットーは『仏花からウェディングまで幅広く承ります』

【《人形》】

魔界では友人の1人として歌手や役者として地位を築いているが、日本では御禁制の品であり、見つければ《人形》は破壊処分、所有者も厳罰の対象である。

《人形師》と《調教師》によって創られ、人と何ら変わらない姿で動き、話し、生活する。

基本的に歳は取らず、稼動年月は創造した《人形師》《調教師》の腕に左右される。

【《人形師》】

《人形》のデザイン、制作、魂を籠めるところまでを担当する。

【《調教師》】

《人形師》の創った《人形》の魂に性格付けなどの調整を施す。

この際に、《人形》に対して禁則事項なども書き込んでいくのだが、《人形師》と《調教師》の腕のバランスが取れないと思ったような調整が出来ない場合がある。

【《微笑む人形の組合》】

日本の《人形師》《調教師》の大半が所属している職業組合（ギルド）。

どこに存在しているのか、謎。

管理能力は非常に高い。

【国立魔法学院蓮花校】

蓮花市にある国内で最大の土地面積を誇る魔法学院。生徒数はさほど多くはない。魔界と日本を繋ぐゲートの1つが存在し、そこを通れば魔界と日本を行き来出来る。日本中の魔法学院は治外法権であり、魔界法が適用される。

【特別警察局】

武尊が勤務する魔法や超能力などの犯罪を取り扱う警察機構。管轄は魔法省。蓮花支局は11年前に大規模な魔力暴走事故が起きてから、戦闘能力が高い者が揃うようになった。戦闘能力だけ見れば、特警局本局よりも蓮花支局の方が格段に高い。

【《人形》供養塔】

特警局内にある、破壊された《人形》の供養のために建立されたもの。花が絶えることはない。

【慰霊碑】

蓮花市蓮花1丁目交差点付近にある。11年前にあった死傷者数数百人という大規模な魔力暴走事故の犠牲者を悼むために作られた。周囲は公園のように整備されており、結界のため非常に静かである。

第1幕 魔皇天界にて

魔皇天界。

《伝説の英雄》《不死の魔皇》との名のある初代魔皇ルネイメス・マウリフェルトが多くの困難を越え、魔皇天界を統一し、この地に首都を定めてから1400年。

首都、ルネイルシア。平和を謳歌する魔皇天界の中心都市である。

白壁に青い屋根の家々が立ち並び、魔皇がおわす壮麗な宮殿はたくさんの人が出入りし、昼の月に見下ろされて今日も人々の前に平和を約束している。

だが、それは城壁の内側の話。

城壁の外側は小さな集落がいくつも存在し、パッチワークの畑がいくつも広がってとても長閑である。

集落はその土地に住む貴族の地位を持つ者が長を務める。といっても、町内会長のようなもので、月に一度ほど集会を開き、人々の意見を取りまとめて宮殿に上申する。例えば、『集落までの道が雨が流れてしまったのですが、住民の積み立てだけでは心許ないので、補助金を少し出していただけませんか』などの意見書を提出するのである。

それはさておき。

フェリシア卿の一族が長を務める集落から首都に戻ってくる整備された石畳道に二頭立ての荷馬車があった。かっぽかっぽとのんびりとした蹄の音を響かせながら、御者台に座る銀髪の男は大欠伸をしている。

「ふア～あ……いい買い物したなァ」

「ええ」

御者台に座っているのは、誰あろうライリス・エイス・サリーフェン侯爵である。首都の城壁を出て小麦畑が一面に広がる集落からの帰りである。奥方であるステラの実家が集落のパン屋であり、ついでに集落の市で新鮮な野菜や牛乳を買い付けた。現に荷車の中は買い物帰りらしく荷物がギッシリの状態だ。ステラは荷物の隙間に座っていたが、何を思ったのか御者台に体を乗り出す。

「隣いいです？」

「あ？ おい！ 危ねエから気を付けろよ！ ……って聞いてねエし」

「うふふ」

ステラは荷車から御者台に出てきて座る。そっと侯爵の腕に自分の腕を回し、彼の肩に頭を預けた。

「いいお天気ですね」

「そうだな。ステラも一緒にいるしな。しかし、この状態って……」

後ろを振り返ると、荷車から野菜の葉が飛び出ているし、牛乳缶がガラガラと楽しげに音を立てている。

「まァ、いつもみたいなかっちりした服装じゃねエし、城壁の外に買い出し行った若い夫婦程度にしか見られねエからいいか」

「そうです」

頷いたステラは侯爵を見る。

「そろそろハロウィンの準備ではないんです？ お店が心配です」

「あァ、そうだな。『3日で帰る』つつって、何だかんだで1週間空けてんなァ。そろそろ菖蒲丸に戻るか。サリーフェン卿って呼ばれんのは、1年の内で1ヶ月ありゃあいい」

「じゃ、帰ります？」

「帰るか。ただ、明日はフェリシア卿が来られるって話だからな。明後日帰るぞ！」

「はい。あなた」

軽く馬に鞭を入れ、少しスピードを上げた。

第2幕 少し長い滞在の間

蓮花市の中央大通りに面する各店舗では、ハロウィンに行われる仮装行列に向けての準備が着々と行われている。当然、中央大通りに面する生花店サイレント・グリーンでも準備は進んでいる。

美桜が今接客している3つ4つの孫娘を連れて上品なお婆さんは常連で、1週間に1回は利用してくれる。

「今日のお花はリンドウなどいかがです？ 久しぶりに嵯峨菊も入りましたから、そちらもオススメです」

「あら、そうなの？ 嵯峨菊を中心にまとめてもらおうかしら」

「はい」

値段云々言わないお客で、美桜はいつも好きなように作らせてもらう。孫娘は花が入れられた冷蔵庫に入り、「寒い！ 寒い！」と笑っている。

「こら、出てきなさい」

「ヤ！ お花と一緒にいる！」

「この子ったら……」

困っている祖母の意を汲んだ美桜は、笑って店の隅を指差した。

「あ、あんなところに変なものが！」

女の子は美桜の声に反応してそちらを見た。

「変なのある！」

「オモチャカボチャって言うんだよ。ほしいのあったら1個あげるよ～」

「食べれる？」

「食べられないから見るだけね～。オモチャと一緒にしばらく遊べるよ」

「ほしい！」

「じゃ、ちょっと待ってて」

祖母に「このくらいでどうですか？」と訊き、了承がもらえると輪ゴムで茎の裾の方をぐるぐると結わいて、サイレント・グリーンの包装紙に包んでから、オモチャカボチャが満載された籠を手取る。

「はい、どれがいい？」

「う～んと……う～んと……」

女の子はひょうたんのような形をしたツートンカラーのオモチャカボチャを手取る。

「これ！」

「うん。じゃあ、それをあげる～」

「うん！ ありがとう、お兄ちゃん！」

「こちらこそ、ありがとね」

美桜は女の子の頭を撫でて作業台に戻ると、作った花束を祖母の方に渡して会計をした。

「いつもありがとうございます」

「いいえ。いつも綺麗なお花をありがとう。こちらの花は長持ちして本当に助かるわ。それに、

この子にカボチャまで」

「いいえいえ。いつものお礼です。公園通りの店長が趣味で育てたものなので、無農薬で安全です。食べられないのだけ覚えていてくださいね」

「じゃ～ね～！」

「それじゃあ、また」

「はい、ありがとうございました！」

店先まで出て、女の子とその祖母に手を振る。

「むふ～、今日もいい仕事してるな～。うふふふふ～」

1人満足の笑みを浮かべ、店内に戻る。

床掃除をして、注文を受けた花束を作り、床掃除。大体この繰り返しで毎日が過ぎていく。

「でも、寂しい……」

ステラも菖蒲丸もまだ帰ってこない。いつもなら「3日で帰る」と言ったら3日で帰ってくるというのに。今回は1週間以上も音沙汰がない。ステラはいいとしても、菖蒲丸はいればいたで鬱陶しいのだが、いないと寂しい。その上、「まさか見捨てられたのでは……」と、心の奥に潜むネガティブ思考が美桜を苛む。

「……『3日で帰る』って言ったのに……」

本当に忘れられてしまったかもしれない。

浦島太郎のような状態ではないのか。鯛や平目が舞い踊って帰ってこれないのではないだろうか。そんなことが頭の中をぐるぐる回る。

「鯛や平目が……ッ！」

「何言ってやがんだ、バカか。バカなのか」

頭を抱えて天に向かって叫んだところで、背後から1週間以上ぶりに聞く声が聞こえた。

「美桜様、お疲れです？」

心底心配そうにステラは美桜の顔を覗き見て、額に手を当てる。

「お熱はないですね。よかった」

「あ、う、ううん。疲れてないし、熱もないから。ダイジョブ……」

顔の前でパタパタと手を振りながら、美桜の瞳がじわりと涙に滲む。

「な、何で泣くんだよ……！」

「菖蒲丸様、ステラさん、お帰りなさ～い！」

2人に抱きつき、子供のように泣く美桜を見て、菖蒲丸とステラは顔を見合わせて首を傾げた。「はて、一体何をしたかしら」と言いたげである。

「僕のことなんて、もう忘れちゃったんだって思ったア～……！」

「忘れっかよ。なア、ステラ」

「ええ」

ステラは頷く。服の袖で涙を拭い、美桜は頬を膨らませる。

「3日で帰ってくるって言ったのに……」

「な……テメエは勝手だなア、おい。いつも帰ってくりゃ『もう帰ってきたんですか』とか言い

やがるくせに」

溜息を吐く菖蒲丸はいつもの定位置——作業台の傍のスツールに腰掛ける。

「嘘吐いた！」

「仕方ねえだろ。いろいろ立て込んでたんだっつもの」

「菖蒲丸様、嘘吐いた～……！」

「泣くな鬱陶しい！」

「ひ……ッ！ う、うう……うわア～ん！」

「あ、菖蒲丸様、そんなに強く……」

ステラは美桜に駆け寄り、その涙を拭う。

「美桜様、私たち、帰ってきましたから……」

「うう……ううう……」

ぽとぽとと涙が落ちていく。

「……本当に、僕のことなんてどうでもいいのかなって……僕のこと、いらぬのかなって…
…思っ」

「ごめんなさいね。そんなこと、誰も思っ」

「うん……うん……」

「だから、泣かないでください。捨てるなんて、悲しいこと言わないでください」

「うん……」

「さ、上で顔を洗ってきてください。そんなお顔でお客様の前には出られません」

「うん……」

美桜は涙を拭いながら、2階へと上がっていった。

「……はア」

ステラは溜息を吐き、菖蒲丸を見た。菖蒲丸は「知ったこっちゃねえ」と言いたげに魔界から買ってきた本を読んでいる。

「あなた」

「何だよ」

顔を上げる菖蒲丸にステラは言う。

「美桜様は、『あなたに約束を破られた』と思っています」

「俺は『確実に三日で帰ってくる』なんざ言っ」

「それでも、謝るべきだったと思っ」

「何で俺が奴に謝る必要がある？ 確かに遊んでた日もあったが、スケジュール的に飛び石だったんだ。その上、珍しく長くいるもんだから、どんどん追加でスケジュールが増えやがる。何でもかんでも俺たちのせいにされてたまるかよ」

「……」

ステラは悲しそうな顔をして菖蒲丸から視線を外すと、今日の注文表を確認する。

すべてにチェックが入っている。冷蔵庫のなかには作り終えた花束が、注文した客が来るのを今か今かと待っている状態だ。「さすが美桜様だわ」とステラは感心し、2階で顔を洗って一息

吐いているであろう美桜を思いやる。

美桜は子供だ。

菖蒲丸は大人として美桜に接している。菖蒲丸も自分勝手な部分はあるが、彼には彼の道理があるため、それを曲げてまで美桜に付き合う必要はないと感じているらしい。

ただ、菖蒲丸も強情だ。気に入らないと自分が間違っているとしても認めない。今回はまさにそれだ。一言「悪かったな」とか「心配かけたな」と言えばいいことだというのに、それが出来ない。

「……困ったものだわ……」

ステラは呟き、店の外に出て外の鉢植えに水を遣り始めた。

外の鉢は売り物もあれば、趣味で美桜が作った寄せ植えもある。それらは皆、冷え始めた空気の中で生き生きと背を伸ばしている。四季咲きバラは秋の花を咲かせ、つるバラはオベリスクに仕立てられて殊更美しい。

「……ん？ 奥方か」

声がして、ステラは振り返った。視線の先にいたのは特別警察局的制服を着た武尊だ。

「あら、野々宮様。御機嫌よう」

如雨露を置き、頭を下げる。武尊は「御機嫌よう」と挨拶を返し、微笑むステラに向き直った。

「無事お帰りになられたか」

「はい。今日、戻ってまいりました」

「そうか。では、サリーフェン卿も？」

「はい。旦那様も。中にいらっしゃいます」

「い、いや、サリーフェン卿に用はない」

武尊は首を横に振る。

「それよりも、ハロウィンのイベントにこちらの店も協力を？」

「はい。まだ、どのようなものにするか決定しておりませんが」

「なるほど。……去年、こちらの店で作っていた花束は非常によかった。今年も期待している」

「はい、楽しみになさってくださいませ」

「あァ。……そうだ。何かあれば、気軽に声をかけてほしい。人が増えると犯罪の種が増えるからな。防犯を心がけてくれ」

「はい。わかりました。何かあれば、すぐに」

「よろしく頼む。……では」

「はい。また」

武尊に手を振り、如雨露を取ろうと身を屈めたステラの頭上から声がした。

「特警か」

「ええ。ハロウィンのイベントが近く、人が増えるので気を付けるように、と」

鉢植えになったフランネルフラワーの株元に水を遣りながらステラは言う。小さな鉢を持ち上げ、少し日なたに移動させた。

「確かになァ、人間が増えっから気を付けねェと」

店のドアに寄りかかりながら菖蒲丸は言う。ステラは立ち上がり、自分の亭主を見上げる。

「それよりも、あなた」

「何だよ、真面目な顔して」

「美桜様はどうしました？」

「美桜？ さァ？ そういや、まだ降りてこねェなァ」

酷く嫌な予感が襲ってくる。

「持っていてくださいませ」

ステラは如雨露を菖蒲丸に乱暴に押し付けると、大して広くもない店内を走って横切り、2階へのドアを開けて靴を脱ぎ散らし、階段を駆け上がった。

リビングを覗き、キッチン、ダイニング、手洗いも覗くがない。3階へ上がり、

「美桜様！ 美桜様?!」

美桜の部屋のドアを叩くが、中から返事はない。

「入ります！」

部屋の中にはいつも美桜がしている店のエプロンと、書き置きがあった。

「……読めないわ」

日本語で書かれた書き置きでステラにはまったく読めない。ただ、いいことが書いてあるとは思えなかった。

突然走ったせいか、少々気持ちが悪い。けれど、そんなことも言っていられず慌てて店へと戻ると、仏花と櫛を客に売っている菖蒲丸の姿がある。

「オーナーがお会計というのも珍しいですね」

「たまには。……ありがとうございました」

客に笑顔で対応する菖蒲丸だったが、客が帰った途端、不機嫌な顔をしてステラを見た。

「美桜は？ 何かあったのか？」

「これが、美桜様の部屋に。私には日本語が読めないので」

「……」

菖蒲丸はステラの手から書き置きを受け取ると、全身の空気がすべて抜けたのかと思うほどの大きな溜息を吐いた。

「……ステラ、店番頼む」

「美桜様は何を——」

「気にすんな」

大事なことを教えてくれない。

大事なことはいつもいつも後回しだ。

店のドアが乱暴に開閉され、菖蒲丸はどこかに走っていった。

「……はァ……」

肩を落とし、ステラは美桜が注文書に補足代わりに書いてくれている拙い魔界語の文字で客注の内容を知り、今一度花束と客注を合わせていく。

「……合ってるわ」

ステラは客が途切れている今、少しでも注文書の整理をしようと、10月1日から注文書を作

業台の下から取り出した。目を通し、気付くことがある。

「あら……」

1週間前からの注文書には魔界語の補足が入っていた。「3日で帰ってくる」と言った菖蒲丸の言葉を信じて待っていたのだろう。菖蒲丸もステラも、これほど長く店を開けることになるとは思っていなかった。だが、美桜は優秀な店長だ。自分たちがいなくても店を管理出来ると思っていたから、あまり心配もしていなかった。けれど、彼は言葉を信じて約束の日からステラのために余分な仕事をしている。

「……何てこと……」

菖蒲丸の言っていたことは正しい。本当に予定がズルズルと延びてしまったのだ。飛び石で入るあちらでの予定は、滞在日数をむやみに延ばした。けれど、その間にステラが一端こちらに戻り、「滞在が延びます」と告げていれば美桜が「捨てられたかもしれない」と考えることはなかっただろう。美桜だけを責められるものではない。

店のドアベルが鳴り、ステラは顔を上げた。

「いらっしゃいませ」

「注文していた花束を受け取りに来ました」

「はい。お名前をお願いいたします」

ステラは微笑みを浮かべて接客する。けれど、心中は穏やかではなかった。

第3幕 美桜の家出

菖蒲丸はとりあえず桂馬の家に行った。

「おい、いるか！」

玄関先で怒鳴る。その声に、マタニティドレス姿の真琴が顔を出した。

「菖蒲丸、どうしたの？ 何かあったの？」

血相変えた菖蒲丸など早々見られるものではない。が、真琴はいつも通りゆっくりと廊下を歩いてくる。大きなお腹が、細い彼女には少々重そうだ。

「真琴、美桜知らないか?!」

「美桜くん？ 私は見てないわ」

真琴は答える。

「美桜くん、何かあったの？」

「家出しやがった！」

「家出？」

あまりにも唐突だった。真琴は目を何度か瞬きさせ、首を捻る。

「家出……」

真琴は頬に手をやり、少し上を見上げた。菖蒲丸は早口にまくし立てる。

「書き置きに『さがさないでください』って書かれてたんだよッ！」

真琴の鼻先にその書き置きを突きつけて、菖蒲丸は小さく舌打ちした。「面倒かけやがって」と忌々しそうに呟く。真琴の眉間に皺が寄ったのはそのときだ。

「1つ訊きたいのだけれど、菖蒲丸は今日帰ってきたの？」

「そうだ」

「この間、お店に行ったとき、美桜くん寂しそうだったの。『まだ、お2人とも戻ってこないんです……』って。……心配かけたのに、また何か酷いことでも言ったの？」

「言ってない」

「そう」

真琴は頷く。

「菖蒲丸」

「何だよ」

「美桜くんは、あなたの何？」

「は？」

「使用人？」

「……そう、じゃねエか？」

「そう。わかったわ」

微笑んだ真琴だったが、次の瞬間に言い放った言葉は凄まじかった。

「菖蒲丸、しばらくここに顔を出さないで」

「はァ?!」

「帰って」

踵を返し、真琴は菖蒲丸を玄関に残してリビングに入った。

「真琴、何でそんな！」

それきり、応答はない。

小さく舌打ちし、都丸邸を出た。

他に美桜が潜伏しそうな場所など思いつかない。いるとしたら、特警局内の供養塔前か、公園通り店か。

「……馬鹿馬鹿しい、何で俺がこんなに必死になってんだよ」

ジーンズのポケットに入っていた書き置きを握り潰し、来た道に戻ることにした。

ステラは閉店後、改めて2階に上がって気付いたことがある。

「……酷いわ」

1週間ほど美桜が独りで暮らしていたわけだが、部屋の荒れようは凄まじかった。リビングも、キッチンも、ダイニングも、掃除をした形跡はなく、洗い物も山ほどたまっている。チラッと覗いただけではわからないことがかなりあった。

ステラは夕食の支度よりも、片付けを優先することにした。1年弱前までここで過ごし、毎日こうして洗い物をし、洗濯をし、掃除をした。菖蒲丸も美桜も笑顔で、ステラも心穏やかだった。

菖蒲丸とステラが結婚し、美桜は独りになった。彼はこれからどうするのだろう。

——そうだ……

洗い物の手を止める。

美桜は独りになってしまったのだ。この家で独りだ。『捨てられたんだ』というのは、『独りにしないで』という美桜の心の叫びなのか。

それにしても、菖蒲丸は帰ってこない。邸に戻ったのかもしれないが、美桜を待つ誰かが必要だ。

電話が鳴った。

手を拭い、キッチンの電話を取る。

「もしもし？」

『ステラさん？ 私です、真琴です』

「真琴様、どうされました？」

電話の向こうの真琴は、いつも通りの優しい声でステラに告げる。

『実は……美桜くん、うちにいるの』

「え？」

『菖蒲丸には言っていないんだけど……ちょっと、あの人の態度に腹が立って……言わなかったわ』

「は、はい……それで、美桜様は……どうしてそちらに？」

『家出したの。菖蒲丸から聞いていないの？』

「何も……」

やはり、大事なことを言っていない。

『そんなことだろうと思ったわ。美桜くんはしばらくこちらで預かるから、お店、1人で頑張れる?』

「それは大丈夫です」

『そう。美桜くん、それだけ心配してたの。あら、どうしたの?』

電話の向こうのやり取りが聞こえてくる。

『……真琴様、お電話換わってもらえます?』

『いいわよ』

美桜の声だ。無事だった。それだけでステラは「よかったわ……」と胸を撫で下ろす。

『もしもし……?』

「美桜様、すみませんでした。私だけでもこちらに戻ってれば……」

『ステラさんは何も悪くない。……でも、しばらく、桂馬様と真琴様のところでご厄介になるから……お仕事、お願いします』

「はい。いつか戻ってきてくださいます?」

『……うん』

美桜の声が遠くなる。そして、誰かと電話を換わったようだ。

『もしもし、桂馬です』

「桂馬様……」

ステラは目を伏せる。

「美桜様のこと、よろしくお願いします」

『うん。それは大丈夫。俺も久しぶりに美桜とゆっくり話ができるの嬉しいし。……それよりも』

「はい?」

『ここに美桜がいること、菖蒲丸には黙ってて』

「え?」

『俺からはそれだけ。言っちゃダメだよ。いいね』

「え、ええ……」

曖昧に頷いたステラは、『じゃあ、そういうことで。またね』と桂馬が電話を切った後、しばらくその場で考え込んでいた。

——どうして、黙っていなければならないのかしら……

菖蒲丸は勘がいい。ステラの隠し事などあつという間に看破するに違いない。それでも「黙っている」と桂馬は言う。

考えてもわからないことをいつまでも考えていても仕方ない。

ステラは洗い物を再開した。かなりの量がある。半分洗って、拭いて片付けなければ片付かない。グラスもカップも、次から次に綺麗なものを出して使っていたらしい形跡がある。そこまでして洗いたくないのかと、なぜか苦笑が零れてしまう。子供のような。

そこで、はたと気付く。

美桜は子供なのだ。姿は大人だが、中身は子供に近い。善悪の判断、人としての常識などは大

人として動けるだけのものは備わっているが、その他の部分はまったく子供だ。仕事は出来るが、その他の部分は子供なのだ。

——本当に、寂しかったのですね……

美桜のお気に入りのカップを拭きながら、ステラは目を伏せた。

菖蒲丸は美桜が行きそうなところをすべて回っていた。行き付けの菓子屋、公園通り店、そして、特警局の《人形》供養塔。

菖蒲丸は供養塔の前にいた。ここにいなければ今日はもう帰ろうと考えていた。そして、空振りだった。

周囲はすでに闇に包まれ、申し訳程度につけられた照明だけが光を提供する。特警局の敷地内とはいえ、周囲は木々に囲まれた静寂の地だった。

「……いねエか」

「どなたかお探しか？ サリーフェン卿」

背後からかかった声に菖蒲丸は舌打ちをした。

「……嫌な奴に会ったもんだぜ」

「それはご挨拶だ」

「そりゃ、すまねエな」

振り向いた菖蒲丸は武尊の顔を見据えた。相変わらず、武尊は淡々とした瞳で菖蒲丸を観察している。

「卿がこちらに来られるとは思わなかった。決して局には近付かぬものだと思っていた」

「ヘエ、そりゃどういう意味だ」

「卿は《サリーフェン》だからな」

「根拠がそれだけかよ。くだらねエ」

「そうだろうか。魔界で貴族として侯爵という高い爵位を魔皇から頂戴しているのだ、相応の力をお持ちなのだろう？ そういった力を持った者が日本でただの花屋を経営していることの方が奇妙に映る」

「そうかよ。勝手に言ってる」

不敵に笑い、菖蒲丸はその場を立ち去ろうとしたのだが、武尊はそれを許さなかった。

「こちらにはどんな用で？」

「別に。テメエにや関係無——」

言いかけ、菖蒲丸は溜息を吐くと、首を横に振って武尊を見る。

「美桜、見なかったか？」

「店長か」

「そうだ。……昼過ぎくらいから、ちょっと姿が見えなくてな」

「家出か」

「違う。ちょっとした意見の食い違いで飛び出してった」

「物は言い様か」

武尊は供養塔を見上げ、菖蒲丸に尋ねる。

「しかし、なぜ店長がここにいると？ ここには店長を襲った《人形》も葬られているのだが」
「詮索無用」

武尊を残し、菖蒲丸はその場を立ち去った。

眉間に刻まれる皺が一層深くなる。

第4幕 彼の存在

「ただいま」

何気ない素振りでもリビングのドアを開けた菖蒲丸は、ソファに座り込んで頭を抱えるステラを見て顔を引き攣らせた。

「ステラ、どっか具合が悪イのか?!」

ステラの顔が上がり、「おかえりなさいませ」と口にした後、溜息混じりに訊いた。

「少し気分が……それより、あなた。美桜様は家出されたのです？」

「違う」

明朗な菖蒲丸の返答。菖蒲丸は平然と嘘を吐く。本人は「嘘は嫌エだ」と言うが、それは詭弁に過ぎない。彼は嘘を吐く。ただし、それは相手に不安を持たせたくないという場合に限る。そして、嘘を吐いた裏で、その嘘が本当になるように動く。

けれど、今回のことは裏目に出た。

「私にまで嘘を？」

「嘘なんて吐いてねエ」

菖蒲丸はステラの隣に腰を下ろし、彼女の腕を取る。

「何を根拠に？ 言ってみな」

「……」

桂馬に黙っていると云われた。菖蒲丸は何も話してくれなかった。

だからステラは選択した。

「勘です」

「……勘？」

「はい。勘です。……美桜様が突然出て行かれた、帰ってこれない、そうなれば疑うべきは家出だと思います」

「なるほど。論理的思考による導きだと？」

「はい」

「わかった」

「お邸にお戻りになります？」

「ここにいる」

「かしこまりました」

「夕飯、何だ？」

「煮込みにしました。寒いですから」

ステラは微笑んで立ち上がると、キッチンへ向かう。

寒いからではない。作る気が起きなかったのだ。だから煮込みにしてしまった。美桜が帰ってこないのはわかっている。2人で食べきれぬ量を作った。

温めなおしていると、不意に菖蒲丸に後ろから抱きすくめられ、ステラは小さく悲鳴を上げる。菖蒲丸はステラの頬に自分の頬をすり寄せながら、

「随分少ねエなァ、鍋の中身が」

と素直な感想らしきものを口にして小さく笑い、「変なこともあるもんだよなァ」言葉は続く

。

「これじゃ、2人分だ。もし美桜が帰ってきたらどうする？ あいつが食う分が無ェ」

鍋をかき回すステラの手は、何も無いかのように単純作業を続ける。

「何で美桜が帰ってこないことを知ってる？」

低く凄みの利いた声が耳元で聞こえ、ステラの肩が震える。菖蒲丸が時折見せる底知れぬ恐ろしさを直接肌に感じて、ステラが目が恐怖を浮かべた。

「ステラ」

菖蒲丸の手は声とは裏腹に、何より愛しそうに優しくステラの喉元から頬を撫でる。

「大丈夫。怒らねェ。言えよ」

「……」

「誰に口止めされた？」

誰にと口にして気付く。

「……そうか、真琴か！」

今思えば、真琴の態度はおかしい。どうしてあの時点で気付かなかったのか。菖蒲丸ともあろう者が頭に血が上っていたとしか思えない。

「ま、真琴様では——！」

「なら桂馬か」

間髪入れずに尋ねられ、一瞬黙ったのを菖蒲丸は見逃さなかった。

「ち、違います……！」

「桂馬だな。理解した。飯食ったら行ってくる。奴と話をつけにやらねェ」

「どうして——」

「『どうして』？」

振り向いたステラに菖蒲丸は「そんな怖ェ顔すんなよ」とステラにキスを施す。

「うちの従業員だからな。これからハロウィンだ。それに便乗すりゃ、花だって売れんだよ。美桜がいた方が何かとわかることもある。あいつはもう何年も花屋をやってんだ」

言いながら、菖蒲丸は鍋の横に皿を用意し、適当な大きさにパンを切った。

「……それだけ、です？」

訊き返すステラに、菖蒲丸は「はァ？」と疑問系で返す。

「他に何があんだよ」

「……家族、とか……」

「ないない」

苦笑する菖蒲丸はパンを皿に盛ってテーブルに出す。

「鍋、温まったぞ。飯」

「……はい」

何を考えているのか、たまにわからなくなる。

けれど、それがステラのマイナスになることはない。彼は彼の思うように周囲の人々のことを

考えている。ただ、それが少々空回ったり、想像の斜め上を飛んでいくだけだ。

「どうせ、桂馬のこった。『絶対に菖蒲丸には内緒だからね』とか何とか言ってんだろ。あの野郎」

すべてわかっているかのような言い草だ。ステラは僅かに眉間に皺を寄せたが、鍋の方を向いているため、菖蒲丸には気付かれてはいまい。

「あなた、お皿を取ってくださいます？」

「おう」

苦しかった。

菖蒲丸は美桜のことをどれくらいわかっているのだろうか。菖蒲丸が桂馬に直談判をしに行ったとして、美桜はそれで帰ってくるのだろうか。

ステラには何もわからない。

未だに、菖蒲丸と美桜の関係性がよくわからない。菖蒲丸も美桜も、ステラに話してはくれない。

都丸邸。

鬱蒼と茂る木々の合間に魔力灯の灯りが漏れている。電気を使わない太陽光発電ではなく魔力充填型発電の石が内部に設置されており、魔力が強くなる夜に発光するようになっている優れものだ。こんな森のような中に置いておいても、『電気系統がショートを起こして火事』という心配が無い。

ドアの前に立ち、玄関灯を見上げる。

——……真琴に何言われるか……

気がかりはそこだ。優しい口調で痛いところを的確に突付いてくる真琴に頭が上がらないのは昔からだが、今は尚更だ。

ドアチャイムを鳴らした。合鍵は持っているが、それを使って入ったくらい真琴に立ち直れないくらいのことを言われる可能性がある。

ドアが開いた。桂馬が顔を出し、菖蒲丸を確認するとバン！ とドアを閉める。

「テメェッ！ 桂馬ッ！ 開けやがれッ！」

「何しに来たんだ」

ドアの向こうから菖蒲丸の声がする。

「美桜と話があるッ！」

「いませんよ～」

わざとらしい返答だ。怒っていいのか、笑っていいのか、わからなくなってくる。

「開ける！ 美桜がいんのはわかってんだよ！」

ドアを叩いて中に怒鳴ると、返ってきたのは桂馬の声ではなく、真琴の声だった。

「菖蒲丸」

「ま、真琴、いるんだろ?! 美桜がいるんだろ?! 入れてくれ！」

「あなた、私に嘘を吐いたわね？」

恐ろしく静かな真琴の声に、菖蒲丸の顔が引き攣る。

「嘘なんざ何も——！」

「美桜さんに『泣くな鬱陶しい』って言ったわね？」

言葉に詰まる菖蒲丸。

「これは酷いことを言ったうちに入らないの？」

「そ、それは、こ、言葉のアヤって奴だ！」

「そう」

ゆっくりとドアが開き、そこにはマタニティ用のパジャマに身を包み、温かそうなカーディガンを着た真琴が立っていた。

「入って。外は寒いわ」

「.....おう」

真琴は他人の妻なのだと思う。苦い思い出がジワリと心に棘を刺すが、今は菖蒲丸にも愛する人はいる。笑顔を浮かべ、彼女に向いた。

「悪ィな」

「悪いとっていなかったら、ここには来ないわよ」

「.....」

返す言葉が無い。

真琴はスリッパを菖蒲丸の前に出し、「こっちよ」と先導する。案内されたのは勝手知ったる桂馬の家のリビングだ。

ドアが開き、中に見えたのは、菖蒲丸を見つめる桂馬と、ソファに深く座って顔を伏せた美桜だった。

「美桜、何してんだ、テメエはよ」

「.....」

ビクッと美桜の肩が震え、恐々と菖蒲丸の顔を盗み見る。

「美桜」

今一度、呼ぶ。桂馬は菖蒲丸を止めた。

「菖蒲丸、ちょっといい？」

「よくねエ」

「聞けよ」

桂馬は腰に手を当て、ビシッと菖蒲丸の鼻先に人差し指を突きつける。

「美桜は俺が預かってもいいんだ。美桜が帰りたくないなら無理には——」

「こっちゃん困んだよ、それじゃあな」

桂馬の顔を向こうへ押しやって道を作ると、美桜の傍に立ち、ぽん、と彼の頭に手を置いた。

「美桜、迎えに来た」

「.....」

「ステラはテメエのことを一言も俺に話さなかった。アイツは、桂馬との約束を守った」

「.....じゃあ、何で知ってるんですか.....」

「勘、だな」

菖蒲丸はしれっと言う。

「テメェがいねェと困んだよ。明日から本格的にハロウィンの支度が始まる。イベント1週間前だ。店長が不在じゃ困る」

「……」

「美桜」

美桜は黙り込んでしまった。桂馬も真琴も口出しはしない。バレるのを前提でステラに話をした。美桜が家にいたところで何の問題もないが、それは美桜のためにも、菖蒲丸のためにもならないだろう。

不意に、菖蒲丸の携帯電話が鳴り響く。「……《組合》じゃなかろうなァ……」と、少々嫌な顔をしつつサブディスプレイに映った名前を見ると、「何だ」と呆気なく出た。

「ステラか」

『いかがです？』

「誰に似たんだか、なかなか強情だ」

頭を掻く菖蒲丸の後ろで、桂馬は呟く。

「菖蒲丸に似たんだ。俺じゃない」

桂馬の隣で真琴は言った。

「どっちもどっちよ」

菖蒲丸の口がへの字に曲がったが、話はまだ続いている。気を取り直して電話の向こうのステラの声に耳を傾けた。

『あなた、美桜様に謝られました？』

うぐ、と喉の奥から変な音がした。

「あ、い、いや、まだ……」

「痛いところ突かれたな」

「そうみたいね」

都丸夫妻の冷静な呟きも耳に痛い。

『たった一言です。あなたも、私が何も言わずに1週間もどこかに行ったらどうします？』

「怒る」

『そうでしょう。私が謝らなかったら、もっと怒るでしょうし——いいえ、悲しくなると思います』

ステラは優しく微笑んでいるだろう。

確かに、同じ立場だったら「捨てられた」と思うかもしれない。菖蒲丸は溜息を吐いた。

「わかった」

『ええ。お2人をお待ちしています』

電話が切れると、菖蒲丸は桂馬と真琴に向き直った。

「美桜を見ててくれて助かった。ありがとう」

桂馬は笑って頷く。

「いいよ。俺も楽しかったし」

「そうね」

真琴も笑った。菖蒲丸は苦笑を浮かべると再び美桜を見る。そして、傍に膝をつき、美桜の顔を下から覗き込んだ。

「……悪かった。すまなかったな」

美桜は謝った菖蒲丸が心底意外だったのか、驚いたように目を見開く。

「もし、次に今回みたいなことがあったら、必ず連絡入れる」

「……ホントですか……？」

「本当だ」

頭を撫で、菖蒲丸は言った。

「帰るぜ。ステラも待ってんぞ」

みるみる泣き顔になる美桜に、菖蒲丸は困ったように笑ってみせると立ち上がり、戸口に立つ桂馬と真琴を見る。

「長々悪かったな。帰る」

桂馬と真琴は揃って頷いた。

帰り道。

菖蒲丸と美桜は2人ともが何を話しているのか考えているのか、ずっと黙りこくっている。

中央大通りの夜はこれからだ。車の通りは多く、光が溢れている。

「……旦那様」

口を開いたのは美桜からだった。

「何だよ」

美桜の声を受け、菖蒲丸は答える。

「……僕のこと邪魔に思ったりしてませんか？」

「何でそう思うんだよ」

「ステラさんと結婚されて、『僕はどこにいたらいいんだろう』ってずっと考えてて……僕、邪魔じゃないのかなって……」

「んな、テメエはなァ……」

菖蒲丸の手が美桜の頭の上の結ばれた前髪をむんずと掴む。

「いた〜いッ！ 筆れるハゲる〜！」

「結婚したのは正月明け。テメエがお払い箱なら、とっくの昔にポイだ」

髪から手を離し、菖蒲丸は続ける。

「何年も真面目に働いてんのは知ってる。テメエはいねェと困んだよ」

「……信じていいんですか」

「信じていい」

頷き、菖蒲丸は少しだけ視線を上げた。そして、手を振る。

「……見ろ、ステラが待ってる」

「あ……」

2階のベランダでステラが美桜の帰りを待っていた。

美桜は小走りに店の前まで走っていくと、ベランダを見上げる。

「ス、ステラさん、寒いよ！ 中に入った方がいいよ！」

「おかえりなさいませ！ 温かいココア、お淹れします！」

本当に嬉しそうに微笑んだステラに、美桜は泣きそうになって慌てて何度も頷く。菖蒲丸は「な、言っただろ」と服の袖で涙を拭う美桜に言った。

「邪魔なんて、これっぽっちも思ってねえよ」

と。

第5幕 家族

10月31日。

特警局《人形》供養塔前で、美桜とステラは武尊に捉まっていた。

といっても世間話程度だ。少し早めにイベント前の巡回に出ようとしたところ、美桜とステラを見かけたため声をかけたらしい。

供養塔前の献花台を見た武尊は非常に微妙な顔をしている。

「しかし、初めてだ」

「何がですか？」

ステラは首を傾げる。美桜も同様だ。

「ハロウィンの日にかぼちゃを供えたのは、君たちが初めてだ」

「え、そうなんですか？ 意外だなア〜」

「意外なのはこちらだ。その発想はまったくなかった」

3人は揃って献花台を見る。

確かに場違いなオレンジ色のかぼちゃがあった。スーパーで売っているかぼちゃと同じくらいのサイズのもので、丁寧に練り抜かれ、目と口がキチンとあり、中で蝋燭が揺らいでいる。

「すみません、かぼちゃ置いて」

「い、いや別に構わん」

武尊はそれ以上かぼちゃに対して言うこともなく、時間も迫っていたため仕事に戻った。美桜とステラは顔を見合わせて笑っている。

「絵理哉は悪戯好きだったから、きっと今日みたいなイベントだったらかぼちゃ喜ぶと思うんだ」

「そうなのですか？」

「うん。僕は絶対に忘れないんだ。前にね、ゲームの中のセリフであったんだ。『忘れなければ、その人は死なない』って」

「いい言葉です」

「うん。僕もそう思う」

開店前にやりたかったことを済ませた2人が店に戻ると、店のいつもの定位置に菖蒲丸がすでに陣取っていた。店のドアには《close》の札が掛けられているが、鍵は開いていた。

「ただいま〜！」

「ただいま帰りました」

「おう、おかえり」

コーヒーを啜る菖蒲丸は訊く。

「置いてきたか？」

「はい。野々宮様にお会いしました」

答えるステラは上着を脱ぎながら頷く。

「驚いてらっしゃいました」

「だろうな」

「でもでも、目立っていい感じだったな〜」

「それを悪目立ちっつ〜んだ」

溜息を吐いた菖蒲丸は、ステラを手招きし、こそこそと耳打ちする。

「あの話は美桜にしたのか」

「いいえ。あなたからされるのだとばかり」

「テメエからでいい」

「.....わかりました」

苦笑したステラは菖蒲丸の傍から離れると、ハロウィンカラーのミニブーケを作る美桜の傍に歩み寄った。

「美桜様」

「ん？ 何々？ どしたの？」

黒バラにオレンジ色の菊を合わせたシックなものだ。美桜の腕は確かである。

「菖蒲丸様と2人で考えたことがあって——」

「僕、とうとう追い出されちゃうの?!」

まさしく、ガン！ という効果音が合いそうな様子で真っ青になった美桜に、菖蒲丸は「バカかテメエは」と溜息を吐いてコーヒーを啜る。

「逆だ」

「逆？ って？」

何のことかわからない——そんな顔をして美桜は首を傾げながら、ステラと菖蒲丸を交互に見る。菖蒲丸はステラを促した。

「わかりました。そんなに恥ずかしいことなのかしら.....」

クスクスと笑いながら、ステラは美桜に告げた。

「菖蒲丸様が美桜様をご自分の養子として籍に入れることになさったんです。『私と菖蒲丸様の子供が美桜様』ということになります」

「え.....だって、僕——」

驚きよりも戸惑いの方が大きい美桜に、菖蒲丸は言う。

「魔界はフレキシブルなんだ。問題無エんだよ。何にもな」

美桜の手が止まる。ステラはその後を継いで花束を作り出した。美桜はフラフラと菖蒲丸の方へと歩いていく。

「養子、ですか？」

「ああ。嫌ならいいんだが。例えば名前が気に入らないとか。魔界だと、美桜・エイス・サリーフェンってことになるからな」

聞いた美桜は叫ぶ。

「うわ、字面ダサ！」

「言うと思った.....」

想像通りだ、と菖蒲丸は笑っている。ステラも笑っている。

「ま、近いうちにテメエが言う『字面ダサ！』な名前になる。こっちじゃ春原美桜でいいけどな

」

「安心しました～……」

「おい、そんなに嫌かよ」

「嫌——」

と脊髄反射で言いかけ、美桜は自分の口を手で塞ぎ、1回、2回と深呼吸してから手を外した

。

「そんなことはないです」

菖蒲丸と苦笑を交わしたステラは、美桜に言った。

「美桜様がお家出されてから、菖蒲丸様は今回のお話をお考えくださったそうです」

「ありがとうございます！ 僕、独りにならないですね！」

「まァな」

菖蒲丸が不機嫌そうな顔になるのは照れ隠しだ。美桜の方も見ず、ステラの方も見ず、新聞に目を通してているが恐らく頭には入っていないだろう。

「あら」

店の時計が開店を告げる。美桜は足取り軽く札を《Open》に返した。

「さ、ハロウィンが始まるぞ～！」

「はい。……こちら、ブーケです」

「あ、僕が作ろうと思ってたのと大体同じだ！」

「あら、そうです？」

「うん！ さすがステラさんだ～」

「ありがとうございます。……そ、それと、あの」

言いかけるステラに、美桜は首を傾げる。

「ん？」

「すみません、午前中、お休みをください」

「別にいいけど」

菖蒲丸もステラの言葉に目を上げる。

「どうした？ 何かあるのか」

「少し」

ステラはなぜか少し照れたように笑っている。

その日の夜。

店先でハロウィンの仮装行列の人々に売れ残りのオモチャカボチャとミニブーケ、それから飴玉を配っていた美桜の後姿を見ながら、ステラは菖蒲丸に告げる。

「あなた」

「ん？」

「あの……」

「何だよ」

言いよどむステラを不審に思いながら、菖蒲丸は顔を上げた。

「父親になる覚悟はございます……？」

ステラの問いに、菖蒲丸は「あ、あァ」と頷く。「突然何を言うのか」と言う顔をしていたが。

「あァ、そりゃなァ。美桜も家に入るわけだし——」

「来年の今頃」

菖蒲丸の言葉を遮り、ステラは言う。

「子供がもう1人、増えているかと思えます」

「は……？」

呆気にとられる菖蒲丸に、頬を染めたステラは微笑む。

「あなたの、エイズ・サリーフェンの子が、生まれます」

「……え?!」

椅子を蹴って立ち上がった菖蒲丸は、にこやかに頷くステラを見て珍しく真っ赤になって両手で顔を撫でた。

「何だ、とんでもなく恥ずかしい……」

「うふふふふ」

「よくやった！」

菖蒲丸は慈母の微笑みを浮かべるステラを抱き寄せ、思わず口付ける。「普段は人前で絶対にそのようなことをしないというのに、珍しいこともあるものだ」となぜか冷静に受け止めているステラ。度胸は据わっている。

「そういや、最近調子悪そうだったな……」

ステラの頬を優しく手で包み、彼女の顔をまじまじと見つめる。

「気付いてやれなくて、すまなかった」

「いいえ。……私も『何かおかしい』と思っておりました。でも、なかなか……その……ヘリテージ先生にお電話したら、知り合いのお医者様を紹介していただいて、今日、行って来たんです」

「なるほどな。……よかった。本当に」

嬉しそうな菖蒲丸にステラは頬を染める。

「重なるときは、いろいろと重なるのですね」

「いや、重なりすぎだろ」

ステラを再び抱き締め、菖蒲丸は「う～ん」と唸った。

「ということは、しばらく仕事はしない方がいいんじゃないか？」

「はい。先生にもそう言われました。妊娠初期は絶対安静だそうです」

「……そうか……俺が親になるのか……」

図らずも、2人の親になる。

「美桜様がお兄様になりますね」

「悪い見本が傍にいることになるのか……」

自分のことを棚に上げてよく言うものだ、と思ったが、ステラは黙って苦笑する。

「真琴に相談しよう、それがいい」

「はい。明日にでもご連絡して、これから先、気を付けねばならないことを教えていただきます」

「それがいい」

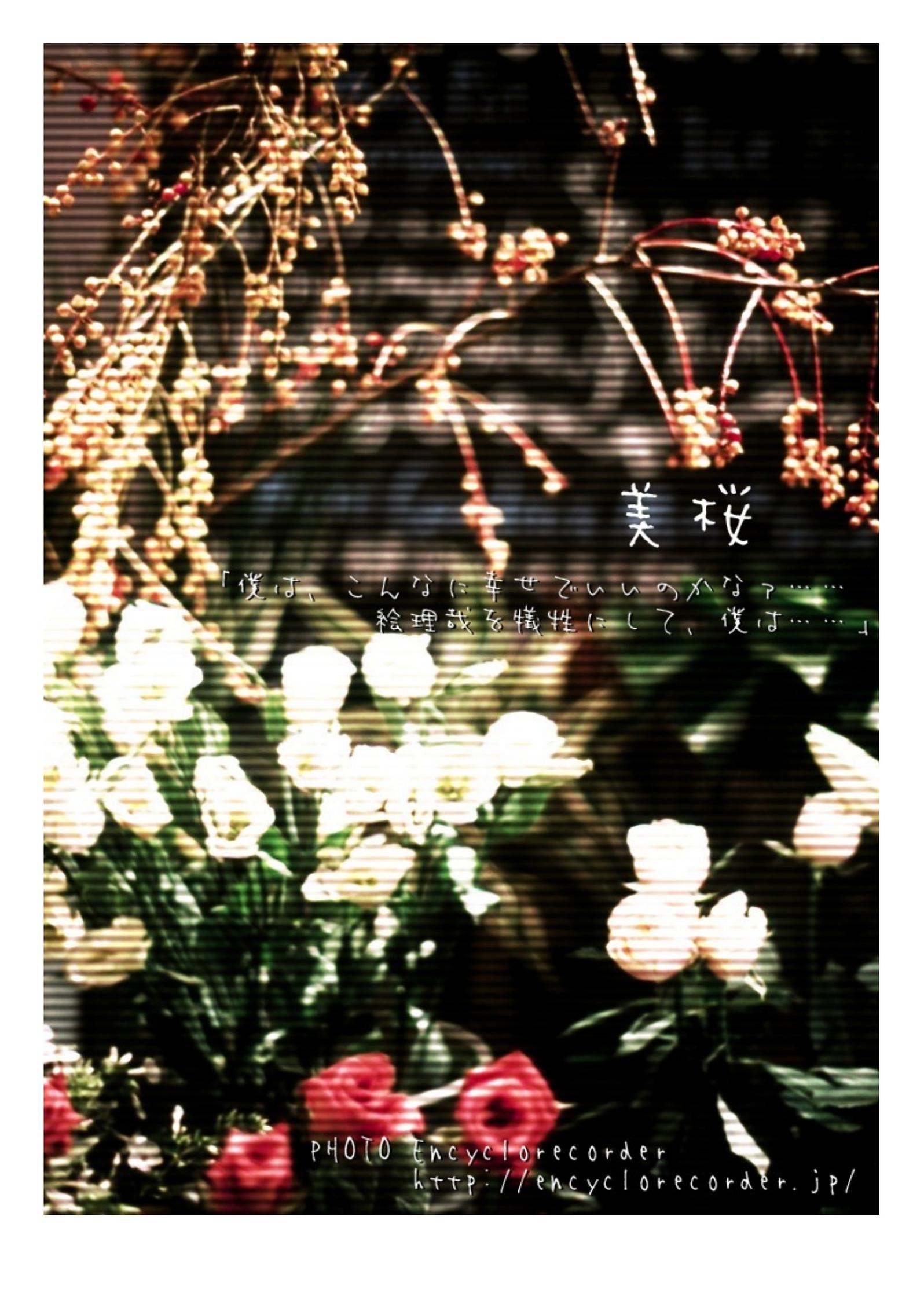
菖蒲丸はステラの肩に手を置き、彼女の顔をジッと見つめる。

「ステラはいい女だなァ」

「な、何です？ 改めて……そんな……」

「思ったことを言っただけだ。愛してる」

そう言って笑う菖蒲丸の笑顔は晴れ晴れとしていた。



美桜

「僕は、こんなに幸せでいいのかな？……
絵理哉を犠牲にして、僕は……」

PHOTO Encycloreorder
<http://encycloreorder.jp/>

第1幕 ハロウィン行列のお知らせ

「『中央大通りの商店主の皆様へ』？」

朝。

店舗2階の自宅スペースにて、朝食を頬張りながら美桜はチラシを眺めている。

「ええ。今朝、ポストの中に入っていました。昨日の夕方に入れられたのだと思いますよ」

カリカリに焼かれたフランスパンにジャムを塗りつつステラは答える。

商店主は魔界人も多く、チラシも日本語と魔界語で書かれていた。魔界語で書かれていれば、ステラにも読むことが出来る。

「チラシに『ハロウィンの飾りつけにご協力ください』って書いてあるね～」

「カボチャを飾ればいいんです？」

「たぶん。僕もよくわからないんだよね～。とりあえず、オレンジ色のカボチャに目と口を描いて、周りのお店がしてるみたいにしてるけど。それだけだと何となく寂しいから、去年はアレンジも添えて飾りつけしてあげたんだよ～。意外に評判よかったね～」

「そうですね。『同じアレンジをください』って仰るお客様、何人もいらして」

「そうそう。意外に売れたよね！　今回はどうしようかな～」

「どんなものを作られるのか、今から楽しみです」

「あはは！　ナイスプレッシャー！　じゃあ、公園通り店の方にカボチャの仕入れを頼まなきゃ」

「あの食べられないカボチャです？」

「うん。そうそう。あとは、オモチャカボチャも」

「どんなものですか？」

「食べられないけど、姿が面白いんだよ～。黄色と緑のツートンカラーだったり、シマシマが入っていたり、瓢箪みたいだったり」

よく卵を泡立てて作られたオムレツを食べながら、美桜はニコニコ笑っている。

美桜とステラが恋人として生花店サイレント・グリーンに2階に住むようになって10ヶ月ほど。

今年のクリスマス、雇用主である菖蒲丸は「はいはい！　お幸せに！」と自棄気味に2人を祝福し、自らは正月明けに美男美女揃いで有名なフェリシア卿縁者の男爵家から一人娘を嫁にもらった。

ステラはその娘をよく知っていた。彼女の家は男爵といっても名ばかりの貴族で、こじんまりした邸に家族だけで仲良く住んでいた。ステラは家が近かったということもあり、両親と兄が経営しているパン屋の焼きたてパンを持って、同じくらいの歳のその娘のところへ遊びに行くこと頻繁だった。

その娘の気立ては優しく、とても美しい。ステラと2人でお菓子を焼いたり、花の手入れをしたり、編み物をしたり——忘れられない友情を築いたものだ。

「菖蒲丸様の奥様って、ステラさんに似てるよね」

ジャムの瓶に入っていたスプーンを瓶から抜き出して蓋をし、ジャムのついたスプーンを口に咥えながら美桜は言う。

「そうかしら。奥様は私よりもずっとお優しい方ですし、とてもお美しいですよ」

ステラは菖蒲丸の奥方本人から、「ステラが日本にいるなら、日本に行きたい。ステラに会いたい」と言って縁談をととても喜んだと聞いた。

「俺が気に入ったんじゃないかねエのかよ？」

と訊いた菖蒲丸に、奥方は高速で頷く。

「はい。ステラに会いたかったのです。……あなたに初めて会ったときは、『なんて堅苦しい人なのかしら！』と思ったけれど、実際は機転が利いて、面白くて、とてもいい人だった。何より、ステラのこと大事にしてくださるし」

「俺は何にしろステラの次かよ」

と、菖蒲丸が肩を落としたのを見て、

「当たり前ですわ。ここに嫁いで、本当に良かったと思いますもの」

思い切り頷いた奥方と、ステラは子供に戻ったように笑ったものだ。

そんなことを思い出しているステラに気付かない美桜は、スプーンを口に入れたまま、

「ま、他の人はどうあれね、僕はステラさんが好きだよ～」

照れも臆面もなく言う。ステラは困ったよう笑いに頬を染めた。

と、そこに――

「ジャムしゃぶりながら何言ってんだ、テメエは」

聞き慣れた声に美桜とステラは揃ってそちらを見る。

「諸君、おはよう」

いつも通り、今時のイケメン男子な格好をした菖蒲丸がいた。ガキン、と美桜の口元から音がした瞬間、スプーンが床に対して並行になったのだから相当強く噛み締めたのだろう。

「……おはようございます。お早いご出勤で」

形ばかりの挨拶に、菖蒲丸は「おう」と応える。そして早速、

「コーヒー――」

「ありません」

所望するが、語尾にかぶる勢いで美桜の言葉がコーヒー要求を一蹴する。菖蒲丸は渋い顔をして2人が着いていたテーブルの、美桜の隣に腰を落ち着けた。

「はア～……冷てエなア……」

「何言ってるんですか。お邸でご飯食べたんでしょ？」

「食ってねエっつの。うちの奥方のつわりが酷くて気の毒だから朝一で実家帰した。向こうまで一緒に行って、うちの邸の人間に預けて男爵家に送らせてきたとこだ」

「あら、お優しい。……ありがとうございます」

ステラは微笑み、「コーヒーですね。お待ちくださいませ」と席を立った。

「あ～、ステラさん、菖蒲丸様のこと甘やかさないでいいんだってば～」

言った美桜の頬を抓り、「知ってるか？」と菖蒲丸は美桜に言う。

「よくハロウィンに飾ってるペポカボチャな」

「ペポ……？ オモチャカボチャのことですか？」

「そうだ。花言葉知ってっか？ 『あなたが嫌い』だそうだ。まさに今の俺の気分だな」

「はい、はいいれふ！ りょうほうやめれ〜！」

両方の頬を引っ張られ、美桜は悲鳴を上げる。

「何でテメエは可愛げが無エんだよ」

「ふぎゃん！」

プリン！ と美桜の頬を限界まで引っ張りつつ指を離し、菖蒲丸は「やれやれ」と溜息を吐いた。悲鳴を上げさせられた美桜は憎々しげに菖蒲丸を睨み、

「そういうふうで育てたのは誰だよ〜……」

と独りごちる。当然、菖蒲丸の眉間に深い皺が寄った。

「あァ、俺だ。俺だよ。悪かったな！」

ふてくされた様子で菖蒲丸は美桜の頭を一発叩き、戻ってきたステラの持ってきたトレイの上を見て「おおッ！」と目を輝かせる。

「飯だ！」

「……本当にお腹空いてたんですね」

「たりめエだろうが。労働するにゃ飯が必須だぞ」

トレイを置いたステラは、おしぼりを菖蒲丸に手渡してから、彼の前に配膳を始める。その手際たるや素晴らしいものだ。菖蒲丸の前にはトースターでカリッと焼いたフランスパンを横から半分に切り、その間にレタスと紫玉葱のスライス、ソテーしたベーコンとロースハムが挟まった、空きっ腹には見目麗しいサンドウィッチ。そして、淹れたてのコーヒーと、デザートにプリンが並んだ。

「お待たせしました」

「サンキュ」

早速サンドウィッチに齧り付く菖蒲丸の隣で、美桜はテーブルの上の一点を見つめたままプルプルしている。

「美桜様、いかがされました？」

きょんととしたステラが尋ねると、美桜はビシッとプリンを指差した。

「そのプリンは僕の——！」

「美桜様のプリンは別にとってありますから。それは、菖蒲丸様にと買ったものです」

「よかった〜」

ホッと胸を撫で下ろす。

「……テメエは少し他人に物を分け与える喜びを知った方がいいんじゃないか？」

サンドウィッチ片手にコーヒーを啜る菖蒲丸の嫌味に、美桜は横目で雇用主を睨んでいる。

「菖蒲丸様、僕のお菓子勝手に食べるじゃありませんか。だから信用を失くすんです」

「テメエの信用ってのは、テメエの菓子を無断で食う食わないで決まるのかよ」

「当たり前です。生存に必要なものを盗む人間が信用出来るはずないでしょう」

言われてみれば「さもありなん」的な回答に、美桜の正面に座り直したステラは苦笑する。

これだけのことを言い合って大規模な喧嘩にならないのだから、2人は仲がいい。実際は大人気ない美桜を菖蒲丸の度量で許しているだけなのかもしれないが。この光景はステラが日本にやってくるからまったく変わらない。菖蒲丸が結婚しても何も変わらない。

「美味エな～……」

「ありがとうございます」

深く頭を下げるステラに、菖蒲丸は軽く頷く。

「家事は奥方がやってんだが、ここんところは調子が悪くてなァ……俺が全部やってたんだわ。自分以外の飯食ったの久しぶりだ」

「確かに、このところ菖蒲丸様、こちらに見えませんでしたもんね」

「うちのことと仕事でそれどこじゃなかったっての。市場が再開してから忙しくて敵わねエ。また、桂馬がやたらと調子が良くて、恐ろしく出来のいい《人形》を創ってんだよ。全部日本に出すのはあまりにも勿体無エ気がしてな、何体か魔界に連れてって、うちの邸で行儀見習いさせてんだ。本家にも紹介した。邸である程度魔界の生活に慣れさせたら、何人か客を呼んで、《人形》に主人を選ばせる。フェリシア卿がこの間見に来たらしくてな、早速《人形》たちに自己紹介してたらしい」

「へ～……そんなことが。桂馬様もお元気そうで何よりです」

「もうすぐ子供も産まれるからな。そりゃ、気合も入るだろ」

バリバリとサンドウィッチを食べ切り、コーヒーに口をつける。

「しかし、参ったぜ。この格好で向こう行ったら怒られた」

「あらまァ……」

ステラはそれ以上言わなかったが、確かにこの格好で邸の執事長やメイド長にでも会った日には、酷い雷が落ちることだろう。彼らは「貴族とは、市井の人々の見本になる品格を持つことが第一である」という矜持の元に成り立っている。自分の仕える主人——それも侯爵閣下ともあろう人が、緊急とはいえラフないでたちで自分たちの前に現れたとなれば、当然のように嗜めることだろう。

「だから、魔界に帰りたくねエんだよ……！」

「……子供か……！」

失笑とともに思わず突っ込んだ美桜に首に手をかける菖蒲丸。

「テメエ、何か言ったか？」

「ななななにににもももももももも」

本気で絞める気がないのをよく知っている美桜は、ニヤニヤしながらガクガク揺さぶられている。

その様子をニコニコ微笑みながら見ていたステラだが、膝の上に置いていた両手をゆっくりと上げ、トン！ とテーブルを叩いた。菖蒲丸と美桜のくだらないケンカが止まる。

「菖蒲丸様。美桜様。ご飯が終わっていないんですから、おとなしく食べてください。片付きません」

あくまでもにこやかな微笑みを浮かべているが、口元が僅かに引きつっている。にへらっと菖蒲丸と美桜は笑い、体を反転させてステラに背を向け、2人で額を寄せ合ってボソボソと囁き

合う。

「……そうなんだよなァ、うちの奥方、どうもステラに似てると思ってたんだ」

「何、今頃そんなこと言ってるんですか」

「ステラと幼馴染だって話、知ってるだろ」

「はい」

「怒り方がまるっきり同じなんだよ。半端なく、おっかねエ」

「……わかりますッ」

カタン、と音がした。そろりと2人が肩越しに振り返ると、ティーカップを優雅に傾けてお茶を飲んでいるステラの姿。カタリとカップをソーサーに戻すと、ニコッと微笑んだ。

「プリン、私が食べてしまってもいいんです？ せっかく冷えているんですから、冷たい間に私がいただきますね」

「心配するな、俺が食う」

「わかっています」

「僕も食べる～」

「今持ってきますね」

苦笑するステラは席を立ち、キッチンへ。

菖蒲丸と美桜は座り直し、「はァ」と揃って溜息を吐いた。

「プリン食お」

「菖蒲丸様、お酒飲むくせに甘い物好きですよね～」

「『酒好きは甘い物嫌い』なんて誰が決めたよ？ 俺は甘いもんも好きだし、酒も飲む。美味しいもんはすべからく食らう主義だっつの」

「存じております。はい、美桜様のプリンです」

「わ～い！」

テーブルの上に置かれたプリンが皿の上で揺れている。滑らかなカラメルが艶やかなプリンの肌を覆っていた。非常に美味そうだ。

ステラはプリンを美味そうに食べている男2人を眺めつつ、「可愛い」と心の中で思ったが、黙っていることにした。そんなことを口にした瞬間、菖蒲丸は照れ隠しに不機嫌そうな顔をするだろうし、美桜は浮かれて菖蒲丸に叩かれるだろう。見なくてもわかる。

プリンを食べていた菖蒲丸はテーブルの上に置かれていたチラシに気付いたようだ。

「……あァ、今年もやるんだな」

スプーンを啜えたままチラシを手取る。

「お行儀がよろしくごさいません」

テーブルの上を片付け始めたステラに窘められ、

「……へいへい」

スプーンを皿に置いて、チラシに目を通す。

「飾りつけのご協力ね～……公園通りの方もやってくれって言われてんだよな。ペポカボチャを仕入れねエと」

「美桜様が仰っていたオモチャカボチャですね」

「あァ。それだ。……去年の美桜はよくやった。今年も何とかなんだろ。上手く出来たら、特別賞与を出してやろう」

「本当ですか——!?!」

「……声デケェ……！」

「イダッ！」

くわっ！ と覚醒する勢いで美桜は菖蒲丸の耳元で叫ぶ。菖蒲丸は美桜の頭を思い切り叩いてから指令を出す。

「とにかく、美桜はいつも通りのカボチャメインのディスプレイ案を考えろ」

「は〜い」

「ステラはカボチャやらハロウィンは絡めなくてもいい。『収穫の秋』ってイメージでミニブーケを作れ」

「それでいいんです？」

「それでいい。んな、どこもかしこもカボチャカボチャだ。毛色が違うもんが見えた方が、ついでに買ってったりするからな」

「わかりました」

ズズッとコーヒーを啜り、片付けを再開するステラに「コーヒーおかわり」と告げると、トレーの上にカップを載せた。

「……菖蒲丸様、勝手過ぎ〜……」

ステラを手伝うために立ち上がりつつ、美桜は呟く。脳と口が直結している作りらしい。考えたことがすべて口に出てしまっている。菖蒲丸にしてみれば、『そんなふうには調整したつもりはない』のだが、事実、こうなってしまうということは、美桜という個体がしっかりと地に足を着け、自分というものを自覚し、成長しているということを示すものだろう。

「誰が勝手だ誰が。俺は経営者として助言してるだけだ」

「菖蒲丸様がアレンジ出来ればね〜……そうすれば、見本も見られるのに〜」

はァ、と大仰な溜息を吐いて、美桜はステラを見る。

「ね〜、ステラさん」

「え？」

また、どうにも返答し辛いことを美桜は振るのである。そのときのステラの顔と云ったら、困り果てて菖蒲丸と美桜を交互に見るだけ。どうにもならなくなったのだろう。

「あ、あ、そうだわ。お店の开店準備をしなくてはなりませんので、私は下に参ります」

と、リビングを後にする。慌てて逃げるステラの足音に、美桜は「はァ〜……」と溜息を吐いた。

「全部、菖蒲丸様が悪い」

「テメエが全部悪ィに決まってるんだろ」

「菖蒲丸様ですよ！」

「いや、テメエだ！」

第2幕 ハロウィンなのでカボチャ（大）です

と、というような子供の喧嘩を繰り広げる雇用主と恋人を放置して、ステラはせっせと開店準備をする。冷蔵庫で開花調整されている結婚式用の花を確認し、「あら」とステラは気付いた。

秋はこっくりとした色目の花が多いし、実物の枝なども豊富だ。これを組み合わせれば素敵なものが出来るに違いない。

そういえば、と思い出す。以前、蓮花市にある美術館で友禅の展覧会があり、菖蒲丸に「教養を深めるために」と美桜と2人連れて行かれた。日本の着物というものに興味が沸いていたステラは、そこで見た友禅に心を打たれた。古来から連綿と続く日本人の美意識は素晴らしく、その中でも彼女がもっとも心を動かされたのは鮮やかに菊が描かれたものだった。菖蒲丸は見惚れるステラと美桜にこう言った。

「すげえだろ。日本でも魔界でもそうだが、元々、染物ってのは自然の恵みからもたらされたもんだ。花屋ならわかんだろうが、『赤』と一口に言ってもいろんな赤がある。バラの赤にもたくさん色合いがあるし、バラの赤とカーネーションの赤はまた少し違う。ケイトウの赤も違う。……何がすげえって、その色の濃淡を、着物の上で表現するってこったな。本物の菊の、こんな花束だったら、『菊は仏花だから飾るのはちょっと……』なんつってる客の度肝も抜けんだろうさ。ここで見たものを、自分で表現出来たら最高じゃねえか。え〜と、ざっとわかる範囲でいくとだな……ここが赤。こっちが真紅、朱色。この辺りが少しオレンジがかって柿色、丹色——」

菖蒲丸はパンフレットと照らし合わせながら、ステラと美桜に着物のどこにどの色が使われているのか説明してくれた。

「……菊は結構あるかもしれない……公園通りにはあるかしら。電話して訊いてみましょう！」

思い立ったが吉日。ステラは公園通り店に電話をかけた。向こうの店長は魔界人であるから、ステラが電話をかけても問題なく会話してくれた。

「もしもし、大通り店のステラです。……あの、お訊きしたいことが」

公園通りの店長は快く、「今はないが、最近、色とりどりの菊が市場に出回っているから、明日にでも仕入れてくるよ」と言ってくれた。

ステラはとりあえず、店にあるポンポン咲きの赤系の菊数本と、オレンジ系統のインフォーマルデコラ咲きと睡蓮咲きのダリア、それから実付きと、緑から赤へ紅葉しようとしている枝物を組み合わせて絶妙な濃淡を持つ赤・橙系のブーケを作ってみた。

「あら、素敵。……今日はこれを店先に飾りましょう」

そうすれば、菖蒲丸の意見も仰げるだろう。

菖蒲丸という男は実に不思議で、自分自身でアレンジを作ろうとすると、本当にとんでもないものが出来上がるのだが、他人の作ったアレンジを見て、それを的確に評価することは出来る。以前、菖蒲丸は美桜に「僕と同じもの作れるでしょう」と言われて作ったことがあるのだが、そのときは非常にキチンとしたものを作り上げた。だが、「オリジナリティがほしい」と言っただけから作り直すと、それはそれはとんでもないものが出来上がる。ステラですら「どう褒めようか」と悩む出来だったのだから、思ったことが口から出る上に、大抵の場合一言多い美桜は菖蒲丸

の超絶アレンジを当然のように滅多斬りにした。菖蒲丸の手刀が美桜の頭に降った程度で済んだのが奇跡のような眨しぶりだった。菖蒲丸はああ見えて達観している大人であるから、自身もアレンジの酷さは理解していたのかもしれない。

駆け足で階段を下りる音が近付き、バン！ と勢いよく自宅スペースからのドアが開いた。

「ステラさ～ん！ 菖蒲丸様がイジメる～！」

ギュッとステラに抱きつこうとした美桜だったが、ステラの手には美しい花束があることに気づき、抱きつくのを自重する代わりに子供のような歓声を上げた。

「わ～ッ！ これ、素敵だね！」

「ありがとうございます」

「菖蒲丸様が作ったらこんなふうにはならないもんね！」

「……」

ステラは苦笑して、美桜に「後ろを……」とだけ言ってから、本日の花束を入れる花瓶になるものを探し始めた。

「みぎゃ——ッ！」

「ははははははは。美桜～、テメエ、いい加減にしとけよ！」

という美桜の悲鳴と楽しそうな菖蒲丸の笑い声が開店前の店に響く。

店先に置かれたブリキの如雨露型花立には、ステラが作った花束が活けられている。

『本日の花：同じものをご購入いただけます』

と日本語と魔界語で書かれた札が花立に寄りかけて置かれた。

「……さすがステラ。悪くねエな。ハロウィンなんざ軽く乗り切れんだろ」

店先で腕組みし、菖蒲丸は頷いている。

「ありがとうございます」

ステラが深々と頭を下げたそこに——

「ステラさん、おはよう～！」

「あら、おはようございます」

「オーナーがこの時間にここにいるの珍しッ！ 店の前で会うのは新鮮だな～」

ワゴン車で乗り付けたのは公園通りの店長である。赤い髪に紫の瞳の優しげな魔界人の男だ。美桜と同じサイレント・グリーンのエプロンをつけていた。

「よう。いいここに来た。また今年もハロウィンやるんだと。入荷数の——」

「問題ないですよ。うちも出し、さっきステラちゃんから電話もらってたからそうだと思ってました。なので」

路肩に止めた車のハッチを開けると、中を指差した。

「見てくださいよ。これ」

覗き込んだ菖蒲丸は「ううむ」と唸って眉間を揉んでいる。

「今年は大きいカボチャで行きましょうよ！ そう思って2個！ ね！ オーナー！」

「……テメエは、美桜並みにわかんねエときがある」

「そうですかね～。ま、毎年こ～んな小さいカボチャですからね！ 今年は大きくいきましよう！」

ステラの一抱えは確実にありそうなサイズのカボチャが1つ、とてつもないほどの存在感を放ちつつ鎮座している。申し訳なさそうに運ばれてきた花々がその陰で縮こまっていた。

「どうすんだ、これ」

「ほらほら、そしたら中繰り抜いて、ハロウィン当日に店先でローソク灯しとくとか！」

「はア～……」

菖蒲丸の口から、体中の空気が全部出てしまったのではないかというくらい大きな溜息が転がり落ちた。

「……買ってきちまったんなら、使わねエと勿体無エもんなア……。わかったよ。置いてけ」

「は～い！ あと、ペポカボチャも。そのペポカボチャたちは、俺んちで採れた奴ですからタダです。どんどん次がなってるんで、うちの店と、こっちと、分けて持ってきますね」

「おう」

その他花も降ろし、花だけは店の中に運び込んだ後、公園通りの店長の乗り込んだサイレント・グリーンのロゴが入ったワゴン車は、颯爽と中央庁舎群の方面へ向かって走っていった。

「さてと、このデカイカボチャどうすんだよ」

「……さ、さア……？」

困り果てて首を傾げるステラと菖蒲丸。菖蒲丸は唸っている。

「うう～む……美桜に繰り抜かせんのはやらせるかなア……。アイツァ、そういうの出来たか？ まア、いいや。一端店に——」

「菖蒲丸、何してるの」

菖蒲丸は聞きなれた男の声に「おう」と顔を上げ、ステラも深々と頭を下げる。

手を繋いで朝食のパンをこの近所まで買いに来ていたらしい桂馬と真琴が通りかかったところだった。憎らしくなるほど仲が良い。まもなく臨月を迎える真琴のお腹は随分大きくなっている。

「大きなカボチャね。ハロウィンだから？」

尋ねた真琴に困り顔の菖蒲丸は頷く。

「困ってるよこだ。こいつをどうしようかと思ってな」

「繰り抜くの？」

桂馬は真琴の手を離し、パンを抱えたままトントンとカボチャを叩きながら菖蒲丸に尋ねる。

「まア、そうなるんだけどなア。小さきゃ描くんだが、デカイから繰り抜くしかねエ。運ぶにも重いしなア……あ～……う～ん……」

困り果てている菖蒲丸とステラを見かねたのか、「それなら」と真琴は提案した。

「……桂馬に繰り抜いてもらったら？」

「俺が?!」

驚いたのは突然話を振られた桂馬である。

「あ、そうか。桂馬なら道具もいろいろ持ってるもんなア」

手を叩いた菖蒲丸は期待を込めた瞳で桂馬を見る。

「……た、確かに、土塊の他に、木でも創るから道具はいろいろ持ってるけど」

そこまで話したとき、店の中で開店準備をしていた美桜が外に顔を出した。

「あ！ 桂馬様！ 真琴様！」

「おはよう、美桜」

「おはよう、美桜くん」

「美桜様、お店に入りましょう」

話に割って入ろうとした美桜を止めたステラは、美桜と一緒に店の中に入る。

「ステラさん、桂馬様来てるのに～！」

ドアを閉めたステラに美桜はぷ～と膨れて文句を言うが、ステラは首を横に振った。

「私たちがすべきことは、時間通りに店を開けることです。準備をします」

「……」

「美桜様」

「……はア～い……」

ふてくされている美桜に、ステラは告げる。

「大丈夫ですよ、美桜様。このまま行くと、桂馬様と真琴様、こちらで作業されますよ」

「ホント?!」

「えエ。菖蒲丸様、たぶん、そうされると思いますもの」

美桜の手を握り、ステラは言う。

「菖蒲丸様は、美桜様のこともちゃんと考えておられますから」

ニッコリ微笑むステラに、美桜もコクリと頷いた。

第3幕 心と思い出すこと

その日の夕方。

「すみません。1日ご厄介になります」

「悪いね。一晩よろしく」

「いいっていいって。明日休みだからな」

「菖蒲丸には言っていないわ。私はステラさんと美桜くんに言ってるの」

ピシャリと真琴に言われ、菖蒲丸は口を曲げ、桂馬はニヤリと笑う。傍で見ていた美桜は、口元を押さえつつ、

「……菖蒲丸様、笑っていいですか」

ボソッと尋ねる。菖蒲丸の答えは明確だった。

「笑ったら殺す」

そのやり取りにステラは小さく微笑み、「お持ちになった荷物をお運びします」と、真琴の荷物を受け取って2階の住居部分へと案内した。それほど広い階段ではないから、ステラが前を歩き、真琴が手摺を使いながらその後ろ、その後ろから桂馬が彼女を支えて上っている。

「大丈夫です？」

後ろを気にしながら、ステラは尋ねる。

「ええ。大丈夫」

微笑む真琴に、小さく頭を下げた。

「今日は申し訳ありませんでした。店の事情でお2人にご迷惑を……」

「大丈夫だよ。今はこれといった仕事入ってないし。むしろ、仕事セーブされてるんだ。最近調子よくて、うっかり創り過ぎちゃって菖蒲丸に怒られた。『俺を殺す気か！』って」

そう言って、桂馬は笑っている。真琴は首を傾げた。

「それより、お店はよかったの？ ステラちゃん、私たちと一緒に来てしまっって」

「大丈夫です。美桜様はお花に関しては天才ですし。『今日の夕飯は気合を入れろ』って菖蒲丸様が」

「菖蒲丸らしい」

「そうね」

ステラは微笑む。

「さ、あと1段です」

階段を上りきって振り向いたステラは真琴に手を貸す。

「わわわ！」

「桂馬、しっかり。階段に気を付けてっていつも言ってるのに」

「いや～……おわ！」

真琴の後ろから上がってきていた桂馬だが、自分の着ていた着物の裾を踏み、蹴躓いて決まり悪そうに笑っている。

「何ていうか、気を付けないとね」

「桂馬がね」

真琴は何気なく厳しい。桂馬は頭を掻いている。ステラはリビングの横を通り過ぎ、キッチンに近い部屋へと2人を通した。

「こちらの部屋をお使いください。鍵などはないですけど」

「いいよ、別にそんなに気を使ってくれなくても」

逆に申し訳なさそうに桂馬は言うが、ステラは「いいえ」と首を横に振った。

「来ていただいたのですから」

ドアを開け、「どうぞ」とステラは頭を下げる。

「ありがと」

桂馬は真琴と一緒に部屋に入る。

「あ、和室」

「でも、ベッドがあるわ」

「布団では真琴様の寝起きが大変だろうということで、菖蒲丸様をご用意しました」

「.....相変わらず菖蒲丸は真琴に優しいね〜」

苦笑が混じる桂馬の声。そこに。

「んな、桂馬なんざ床でいいんだよ。布団があるだけマシだと思え」

後ろから聞こえた声に桂馬は「あァ?!」と振り向く。想像通り、そこには菖蒲丸がいた。

「菖蒲丸様、そういう——」

「菖蒲丸、可愛くないことを言わないの」

嗜めようとするステラよりも早く、真琴に太い釘を刺される。

「あなたがそんなだから、美桜くんがいつまで経っても反抗期から抜けられないんですよ」

「美桜の反抗期は俺のせいじゃねエっての」

「あなたのせいよ。美桜くんをイジメているのではないの？」

なぜか説教を食らい始めた菖蒲丸を横目にせせら笑い、桂馬はステラに向き直った。

「ありがとう。ステラさんの仕事に戻ってくれていいよ。こっちはこっちで、菖蒲丸のことイジメとく」

「桂馬ァ、テメエな——」

「菖蒲丸、話はまだ終わってないわ」

真琴の言葉は優しいが、その言葉は非常に的確に菖蒲丸の痛いところを突いてくる。

「.....うう.....俺はテメエに逆らえねエっての.....上手く利用しやがって.....」

「.....で、では、失礼いたします」

「うん。お夕飯、楽しみにしてるね」

「ステラ、俺を見捨てるな——」

「菖蒲丸、こっちを見なさい」

菖蒲丸の泣き言を背中に聞きながら、ステラはリビングへ向かう。

「ええと.....今日のお夕食は、お客様がお2人、菖蒲丸様、美桜様、私。5人で考えればいいのね。皆様、どれくらいお召し上がりになるのかしら.....? 少し多めに作りましょう」

指折り数えながら、財布を手取る。

「お買い物に行かなきゃ」

食事の後、ステラと真琴、菖蒲丸はリビングでお茶を飲みながら、桂馬と美桜がカボチャと格闘しているのを眺めている。

大きなレジャーシートの上に蓮花市指定ゴミ袋を広げて置き、その内側にカボチャ。ゴミが出たら、そのままゴミ袋に入る仕組みである。万一零れてもレジャーシートのおかげで汚れない。

「美桜、カボチャのわた取ってくれる？」

「え、僕が？」

「他に誰がいるんだよ」

「え？ 菖蒲丸様でいいじゃないですか」

「あァ、菖蒲丸でいいや」

「俺でいいやってな、どういう了見だ。ステラ、手伝ってやれ」

「はい。……美桜様、頑張りましょう」

「ステラさァ〜ん！」

ヒシッ！ とステラにしがみ付いたと見せかけて、ギュッと抱き締めている。

「愛してる！」

「美桜様、今はそれよりもカボチャを……」

困り顔で笑っているステラと美桜を見て、真琴はクスクス笑っている。

「仲がいいのね」

「あァ。ステラは俺よりも美桜を選んだからなァ」

眩くような菖蒲丸に、真琴は彼を見る。

「あら、いろいろと根に持ってるの？」

「別に」

菖蒲丸はカップを傾ける。

「俺には美人の嫁が来たし、美桜が何だかんだで一人立ち出来んなら、それでいい」

真琴は大きくなったお腹をゆっくりと擦りながら笑っている。

「大人になったわね、菖蒲丸」

「おかげさんで」

菖蒲丸が苦笑したとき、

「出来たァ——ッ！」

「なかなか、いいんじゃないかな」

「すごいです！ カボチャを本当に繰り抜いてしまいましたね……」

カボチャと格闘したステラたち3人が、諸手を上げて歓喜の声を上げた。彼らの真ん中には綺麗に繰り抜かれ、ジャックランタンらしい姿のカボチャが鎮座している。

それを見た菖蒲丸は愕然とし、真琴は手を叩いた。

「……すげェ存在感と、あのわたと種の量」

「本当、すごいわ！」

わたまみれの手を叩いている美桜とステラ。額の汗を拭う桂馬。

この光景が眺められただけでも、なぜか「よかった」と思ってしまった菖蒲丸は、同じテーブルにいる真琴を見る。

「？ 何？」

「い～や。……平和だな～と思っただけだ」

「そうね」

微笑み合い、カボチャを囲む3人へと視線を移す。

真琴は体調のこともあり早めに休んだが、残り的人々はリビングでしばらくカードゲームに興じてから、真夜中を回った時間にようやく部屋に入った。菖蒲丸も一人で邸に帰るのは嫌だったらしく、いつも使っている部屋に入ることにしたようだ。

「おやすみなさいませ」

ステラは自分以外の全員が部屋に入るのを確認してから、家から店舗までの戸締り、火の始末などをすべて確認し、客がいるため、廊下の電気だけはつけたまま部屋に入った。

「お疲れ様」

部屋に入ると、美桜がマンガ雑誌を読んでいる。お気に入りらしい牛柄パジャマを着て、寒いのかルームシューズを履いていた。

「美桜様、もう遅いですから」

「大丈夫。明日お休みだし」

「でも、菖蒲丸様の起きられる時間は早いですよ。菖蒲丸様の時間に合わせて朝食にいたしますから」

「あ、そうか。桂馬様も真琴様もいらっしゃるしね」

「ええ」

ステラは顔を、ベッドに腰掛ける。

「休みます？」

「もう少し起きてる」

「そうです？」

ステラはベッドに潜り込むと、枕元の本を手取る。魔界でも日本でも刊行されているオディエ男爵夫人のベストセラーだ。

「……ステラさんだって、まだ寝なさそう」

「今、いいところなんです。主人公の《人形》が想い人を盗んで、過去の罪を悔いていくところで」

「へ～……《人形》の過去の罪かア……」

ぱたん、と雑誌を閉じ、美桜は甘えるようにステラの隣に潜り込む。

「ステラさん……」

「どうしたんです？」

葉を挟んで本を閉じ、抱きついてきた美桜の前髪を撫で上げる。泣きそうな目でステラを見つめていた。

「……何でもない……」

子供のようにしがみつくと美桜の髪を撫でながら、ステラは優しく囁く。

「……絵理哉の、ことです？」

「……」

「美桜様……」

「僕は、こんなに幸せでいいのかなァ……絵理哉を犠牲にして、僕は……」

時折、こういうことがあった。

美桜は躁鬱の気がある。特に、絵理哉という《人形》に対して、美桜自身の我が侷で絵理哉が壊れ、最終的には特別警察局に捕縛、破壊処分されてしまったという自責の念があるため、彼に関するのを思い出すと、酷く鬱々とした状態になった。

「美桜様……」

ただ、抱き締めるしか出来ない。

「ハロウィンは、死者の魂がこの世に戻ってくる日だと聞きました。ハロウィンに仮装するのは、死者の魂と一緒に溢れてくる悪魔に、自分たちも悪魔の仲間だと錯覚させるためだと。……美桜様、お盆にも言いましたが、ハロウィンにはきっと絵理哉が帰ってきますから。悲しんでいないで前を向きましょう」

腕の中で小さく頷く美桜が酷く小さく感じる。子供のように感じる。

愛しくて、彼の額に唇を寄せた。

第4章 ハロウィン

ハロウィン当日。

少々冷え込んでいる。蓮花气象台が発表した気温は16度。少々肌寒い。配達で外に出たステラも、店の外で作業中の美桜も、少し厚めの上着を着込んでいる。

午後6時から中央大通りでは、ハロウィン行列が練り歩いていた。子供も大人も、仮装してきた人々はその列に加わることが出来る。

サイレント・グリーンは時間外営業をしている。いつもなら18時には閉めてしまうのだが、今日は商店会のハロウィンイベント終了まで店を開けている予定だ。商店会のハロウィンが始まってから毎年のことである。

美桜は店頭飾っているカボチャの中に雑貨屋で買ってきた大きめの蝋燭を数本入れ、ランタンがきちんと光っているのを確認してから店に戻ってきた。

「菖蒲丸様～、カボチャ、いい感じですよ～」

「あア、そうかよ」

どうでもよさそうに答え、スツールに腰掛け、コーヒーを啜りながら作業台の上に新聞を広げて読んでいる菖蒲丸に、美桜はいつも通り噛み付く。

「菖蒲丸様！ 何でそんなにどうでもよさげなんですか！」

「穴の空いてるカボチャに光入れたら、穴空いてるところから光は漏れんだろうよ」

「も～！ そこは作業するところで、新聞を読むところじゃありません！」

叫んだとき、外から戻ってきたステラは美桜の様子を見て大体何があったのか察したらしい。「ただいま戻りました。……カボチャ、いい感じに光ってます。お店のカボチャが、一番素敵でした」

「！ ステラさんッ！」

ヒシッ！ 美桜は迷わずステラに抱きつく。菖蒲丸は退屈で欠伸を噛み殺しつつ、頭を掻いた。

「あア、そうだ。外のミニブーケの籠、中身がないなら下げちまえよ」

パラリと新聞をめくる音。菖蒲丸が動く気は毛頭ない。ステラと美桜は「外の鉢なども中に入れよう」と揃って店を出る。

いくつか出ていた籠や鉢をすべて中に入れ終えた頃、遠くに人の歓声が聞こえた。

「あ、行列が来たよ！」

「まァ！ 去年よりも皆さん趣向を凝らしてらっしゃいますね」

子供たちがお菓子を入れる籠やバッグを持っているのを見て、ステラは「そうでした！」と店の中に戻ると、菖蒲丸を「申し訳ございません」という丁寧な言葉とは裏腹に少々乱暴にどかし、作業台の下から飴玉の袋をいくつも出す。

「いつ買ってたんだよ」

「この間。この日のために」

「そりゃすげエ」

アレンジに使う籠の中に飴玉を袋の中からすべて空けた。それを見ていた菖蒲丸は立ち上が

ると、店の片隅に置かれたオモチャカボチャが入った籠をステラの前に置く。

「明日から売りもんになりやしねエ。カボチャなんぞ季節もんだ。この売れ残り、ほしいってガキどもにくれてやれ。どうせ元手はかかってねエし」

「はい。わかりました」

快いステラの返事に頷き返した菖蒲丸は、再び新聞を読むのに戻る。

飴の籠とカボチャの籠を持って外に出たステラは、「冷えますね」と呟いてから美桜にカボチャの籠を差し出した。

「美桜様、『これを子供たちに』と菖蒲丸様が。『明日からはもう売れないから』と」

籠を受け取り、美桜は苦笑した。

「前だけだったらいい話で終わるのに、『売れないから』ってつけるのが菖蒲丸様だよね……。
ま、いっか！ みんな喜ぶよ～！」

美桜とステラは笑い合い、行列が来るのを待つ。ステラはふと空を見上げた。

「あら、今日はお月様が見えます」

「ホントだ。綺麗だね～」

「ええ。とても。魂まで澄んでいくようです」

街の光に隠れそうになる月を見上げていたステラだったが、繰り返される子供たちの声で我に返った。

「Trick or Treat! Trick or treat!」

元気のいい子供たちの声が通りに響いている。

「まァ、可愛らしい！」

ステラと美桜は、2人で子供たちに飴玉と希望者にカボチャを配る。

「カボチャさ～ん！」

「カボチャ～！」

「食べられないからね～。飾って楽しんでね～」

美桜はそう言いながら、「ほしい！」と手を出した子供たちに手渡していく。

一通り子供たちが過ぎ去ったときだ。

「Trick or treat!」

タキシードにシルクハット、仮面をつけた青年が2人の前で足を止めた。

「はい、どうぞ」

ステラは青年に飴を1つ差し出す。青年は飴を受け取りつつ、ステラの手を握った。手袋に包まれた青年の手は冷たい。

「ありがとう。相変わらず可愛いよね～」

「え？ 『相変わらず』……？」

「また会えて嬉しいよ～」

むやみに手を引っ込めることも出来ず、ステラは困惑しつつ微笑んでいる。

——誰だったかしら……

声は聞き覚えがある。だが、名前が出てこない。

「こっちは恋人？」

「え、ええ。大事な人です」

「そう。……そっか」

青く光る仮面の奥の瞳が微笑んだ。

「どうか、幸せに。……じゃ、俺はこれで。またね。また会えるといいね」

ポカン、としている美桜を見た青年は、美桜の籠の中からカボチャを1つ手に取り、悪戯っぽく笑った。

「忘れない限り、また会える。だから、見守ってる。……朱理」

ハッとして2人が今一度そこにいたはずの青年を確認しようとした瞬間、彼の姿は消え失せ、飴玉とカボチャが1つずつなくなっていた。

「絵理哉！」

という店の中から響いてきた菖蒲丸の怒鳴り声に美桜とステラは顔を見合わせる。

「絵理哉……だったんだ」

「はい」

ステラは確信する。絵理哉だ。声の調子も、仕草も、僅かしか接点がなかったにもかかわらず記憶は色濃く残っている。

『じゃ、俺はこれで。またね。また会えるといいね』

絵理哉はステラに、以前まったく同じ言葉をかけている。

「……間違いなく……絵理哉です……」

同じとき、菖蒲丸は店の中で外の様子を眺めていたのだが、美桜とステラが話をしている青年が一瞬にして消えたのを見て思わず椅子を蹴って立ち上がっていた。

「絵理哉！」

呆然と立ち竦むステラと美桜の姿だけが残されている。

確証はないが、確信はあった。人の立ち振る舞いは人を判別出来るだけの要素をこちらに与えてくる。

「……何で——」

呟いた菖蒲丸が座っていたスツールに腰掛けると同時に、店に慌てて戻ってきた美桜とステラが叫ぶ。

「大変です！」

異口同音だ。

「絵理哉が！」

「見てたっつの」

菖蒲丸は溜息を吐く。

「何で奴の幽霊が出んだ。ハロウィンに」

「僕に言われても……」

口ごもる美桜を見て、ステラは言う。

「ハロウィンだから、じゃないです？ 亡くなった人の魂が帰ってくるのですよね？」

菖蒲丸は「あァ、なるほどな」と小さく頷く。

「……じゃ、そういうことにしとくか」

新聞に視線を落としつつ、独りごちる。

「あの婆アが裏で糸引いてんじゃなからうな……考えすぎか……？」

遠くで花火の音がした。ハッと顔を上げた菖蒲丸は時計を見て「忘れてた！」と立ち上がる。

「店に鍵掛ける！ 出かけんぞ！ 8時から打ち上げだ！ 予告花火に気付いてよかったぜ」

「あ、花火見に行きます？ わ～い！」

菖蒲丸は2階へ上着を取りに駆け上がり、店を消灯して鍵を掛け、カボチャの蝋燭を消して2人を伴い花火会場へ急ぐ。

「菖蒲丸様、花火好きですよ～」

「魔界にもあるが、花火は日本の花火に限る。魔界の花火には《粋》が無エ」

「日本の花火は綺麗です。色とりどりで驚きました」

打ち上げ会場は、月之宮大通りを行った先にある一級河川月光川の河川敷だ。

「わわわ、結構人が多いですね……！」

「ステラ、手。逆の手は美桜と繋いでろ。逸れるぞ」

「え……あ、はい」

「菖蒲丸様、空気読んでくださいよう……ここは僕が『ステラさん、はぐれないように手を繋ごう』って言うべきところです。うん。僕、間違えてない」

「テメエ、はぐれちまえ」

「ヒド！」

3人で手を繋ぎ、肩を寄せ合い、人並みの中を河川敷へ。

「出遅れましたね……」

「あア、完全にな……」

美桜と菖蒲丸は肩を落とすが、ステラは2人の手を強く握る。

「ここからでも、見えますよ。……ほら！」

3人の目の前で光の花が咲き、1拍遅れて腹に響く音が辺りに広がる。

「肌がピリピリするほど大きい音ですね」

「そうだな」

「来年も、こうして花火が見られたら嬉しいです。今度は、菖蒲丸様の奥様もご一緒に」

「あア。言っとく」

ステラの言葉に頷いた菖蒲丸だったが、「いや、待てよ……？」と首を傾げた。

「……花火は……ガキは泣くだらうな……」

予定通りであれば、産まれて5ヶ月という赤ん坊を連れてこなければならぬ。人込みであるし、こんな中を連れて歩くのは可哀想だ。「あ！」と美桜は菖蒲丸を見上げる。

「それなら、ちょっと遠いですけど店の3階から見ましょうよ」

「なら、来年は3階でワインとチーズで乾杯しながら花火もいいかもしんねエな」

クスッとステラは微笑む。

「素敵です」

「だね～。なら、桂馬様と真琴様も！」

「そうすっか」

菖蒲丸は頷き、嬉しそうに微笑み合うステラと美桜を見て苦笑する。

——俺は、すっかり父親代わりだな……

その日の夜、寝室で、美桜はステラの膝枕でテレビを見ていた。ベッドの上なのだから枕があるだろうが、膝枕をどうしてもしてほしかったらしい。

「……ステラさん」

「はい？」

「……僕たち、まだまだ恋人って感じじゃないよね」

「違うのです？」

「い、いや、恋人なんだけど」

パタパタと美桜の手が宙を扇いでいる。

「は、恥ずかしいんだけど、そろそろ、その……出会って1年になるし……な、名前を呼び捨てで呼び合ってもいいんじゃないか、と……思ったり、思わなかったり……」

「どちらです？」

「思ったり」

ステラは手を伸ばして近くの棚に載っている耳搔きを取ると、美桜の耳掃除を始めた。

「私は、構いません。……美桜」

不意に聞こえた名前に、美桜の耳が一気に赤く染まる。

「また、来年、花火を見に行きましょう。みんなで」

「うん……ステラ」

ステラの手が止まり、頬に手を当てる。赤く染まっていた。

「……恥ずかしいです……」

美桜は耳搔きを耳の中から抜き取り、ゴロリとステラを下から見上げた。

「きっと、すぐに慣れるよ。日本の生活みたいにさ。……すぐに、日常になっちゃうよ」

「そうです？」

「うん。きっとそう。……じゃないと、きっとまた絵理哉が化けて出る」

「心配しているのでしょうか……？」

「かもね～」

美桜は一瞬困ったような笑い顔を浮かべたが、すぐに気分を取り直してニッコリ笑うと、逆の耳を上にした。

「今度こっち。……って！ テレビ見えない……！」

「我慢してください。すぐ終わりますから」

武尊

使命感に燃えるあまり、彼には振り返る余裕がない。
的確に物事を判断出来るが、それは事件に陥つてのみだ。

PHOTO Encycloreorder
<http://encycloreorder.jp/>

第1幕 多忙を極める

野々宮武尊は、自分の事務机の上に載った卓上カレンダーと、自分の持っている携帯電話のカレンダーを確認し、本日配られたばかりのシフト表を確認する。その視線たるや、「何かの間違いであれ！」と願う憐れな子羊そのものである。

「……」

顔にも、声にも出さないが、彼は内心酷く落胆していた。

10月31日は蓮花市中心部でハロウィンが開かれる。すでに警察にも特警にも届けは出ており、許可も下りている大きな祭りだ。メインのハロウィン行列が終わると花火大会もある。花火大会の人出は毎年のことながら相当なものだろう。

その祭りを恋人に案内してやろうと思っていた矢先に、シフト表には現実が描かれていたのである。

通常の勤務であるならば、彼の休みにちょうど当たる予定だったハロウィンなのだが、大規模なイベントのため、休日は返上である。それは当然のことなのだが、野々宮武尊とあろう者が、それをうっかり失念していたのだ。

「野々宮」

「はい、ティアード局長」

特別警察局蓮花支局の局長、ティリド・ティアードが武尊を呼ぶ。

「後程、ハロウィンの対策会議が警察、蓮花市商店会と合同である。俺と出席してくれ」

「わかりました」

局長の信頼も厚い。仕事は非常に順調だ。

——ハロウィンの件は残念だが仕方がない。

少々ガッカリしたのは事実だが、仕事に私情は挟むことなど出来ない。

犯罪被害者を減らすこと。それが彼の望みなのだ。

一方その頃の、生花店サイレント・グリーン。

「あ～、儲かって儲かって笑いが止まらない」

言葉とは裏腹に、菖蒲丸は非常に疲れた顔をしていた。さすがに根っこは貴族であるため、自分の見た目を常日頃から非常に気にする菖蒲丸なのだが、今日ばかりはそんなことを言っている余裕はないようで、セットする気力もなかったのか、ワックスで固められていない真っ直ぐな髪が顔の半分を覆い隠している。

「その割には景気悪そうな顔してますね」

空気を読む気がない美桜の発言に対して、突っ込む気力がないらしい菖蒲丸。

「桂馬が、創り過ぎ。『子供育てるのってお金かかるって言うから』とか言いながら、最高品質の《人形》をバンバカ出してきやがる。1週間に1体とか、奴アバカじゃねエのか。奴の魔力は無尽蔵かコンチクショウ」

「……相当、儲かりますね」

「桂馬だけで1ヶ月3億動いたぞ……冗談じゃねエっての。俺ア、桂馬の他にも担当の《人形師

》持ってんだぞ……マジで殺される……過労死する、過労死」

「今週、何体調整したんですか？」

「3体」

「……？ 前はそのくらいじゃ何ともなかった気がするんですけど」

「桂馬の《人形》の品質が数段上がってんだよ……奴の《人形》の調整だけでカァ使い果たすって……。『菖蒲丸は揚羽蝶の《人形》の調整が出来なくなった』とは言われたくねェんだよ！」

グワッ！ と勢いをつけて立ち上がった菖蒲丸だが、すぐによれよれと座り込む。

「……立ち眩んだ……」

美桜は萎れている菖蒲丸を見かね、こう進言した。

「ホント、病院行きます？ 奥様が心配しますよ？ それでなくてもつわりが酷いんでしょう？

どんなもんか、僕は知りませんけど」

「……まァなァ……男にゃわからんだろうよ。……ステラに魔界まで送って行ってもらってっけど……」

「だからって——」

「病院嫌エだわ～……」

「すぐにワガママ言うんじゃありませェん！」

美桜の声に耳を塞ぎつつ、菖蒲丸は「はァ～……」と溜息を吐きつつ肩を落とした。

「……ま、アレだ。《組合》もバカじゃねェからよ、俺がこんな状態だっつてのわかったらしくて、桂馬とか、他の《人形師》にも『少し休め』か『しばらく《調教師》変更』って通達出したらしい。……桂馬んところは、《人形》を家に置いとけるし、あいつらで面倒見られっから、調子いいときにまとめて創っても俺が出向いて仮調整だけしときゃ生活にゃ何てこたないんだが、他の《人形師》の商品となるとそうはいかねェからなァ……」

再び溜息を吐き、くしゃみをした。そして、咳き込む。

「……風邪ですか～？ ヤだな～……僕にうつさないでくださいよ～……」

「知るか」

「奥様が今日からいないって言っても、どうせここに寝泊りするんでしょう？ ステラさんにもうつさないでくださいね！」

「……うわ、そうだった……家事やる奴がいなくなるわ。うつせねェなァ、確かに……」

「上に行って、寝てたらどうですか？ お店にいなくてもいいんですよ。僕1人で何とかかなりますから」

「冷てェこと言うなよ」

「いや、菖蒲丸様の体を思って言ってるんですよ？」

床の掃き掃除を始めた美桜は言う。枝や葉が一度のアレンジでかなり散らかるから、一度ずつ掃除しないと床がゴミで埋まるのだ。

「薬王堂さんから薬もらってきましょうか？ 滋養強壯と風邪の薬」

「断る」

きっぱりした拒絶に美桜は口の端を曲げて、それ以上は言わずに掃除を続ける。

店の中は冷蔵庫が動いている音しかしなかった。そこに、時折電話が鳴るのだが、菖蒲丸は出ようとしな。普段は出るのだが、今日は本当に動く気がしないらしい。

「はい、サイレント・グリーンです。……あ、はい、ご注文ですか？ はい。本日の午後5時に……はい。劇場にお持ちになる、はい、花はこちらでお選びしても？ ……いえ、ご希望の花がございましたら、ご予算に合わせてお作りいたします。……はい……はい……花の色もある程度はご指定いただけます。お店にあるものに限られますけれども。はい……」

美桜はキッチンと店を取り仕切っている。

メモを取りながら、店で仕入れた花でどんなものが出来るのか細かく話している。確かに、ステラが来る前はしばらくこうして1人で仕事をしていた。それでもキッチンと出来ていたのだから、仕事に関しての能力は高いに違いない。蓮花のタウン誌でウェディング特集などがあると、大体美桜がブーケの見本を作っている。実に楽しそうに、美しいブーケをいくつも作った。

そのブーケを持つモデルにステラがなったこともある。本人は「恥ずかしいです！」と逃げようとしたのだが、菖蒲丸の「まァまァ、いい経験だろ」の一言でモデルをすることになった。

その現場に同席したのが、ステラの恋人の特警局員、野々宮武尊である。

「では、お待ちしております。ありがとうございました。失礼いたします」

丁寧に電話を切ったとき、ドアベルが来客を告げた。

「いらっしゃいませ」

来客は件の野々宮武尊だった。特警局の制服を着ているが、ステラの顔を見に来たのだろう。この辺り、かなりフリーダムだと美桜は思う。本人は無自覚だろう。

武尊は作業台の傍にボーッと座っている菖蒲丸を見て、眉間に皺を寄せた。

「……オーナーは目を開けたまま死んでいるのか？」

「たまに瞬きするので生きてます。もし死んでたら僕が犯人じゃないですかァ！」

「そうなる」

真面目な顔をして冗談を言うため始末に終えない。

「ステラ嬢は？」

「今、出かけています」

1つ頷き、武尊は美桜を見る。

「こちらの店はハロウィンには参加するのだろうか」

「しますよ。毎年のことですから。それが何か？」

「いや、別にどうということではないのだが——」

「アレだろ、特警もハロウィンの警備だ何だで、デートしようと思ってたっのに時間がなくなったから、その辺の話をステラにしてェんだろ」

ニヤニヤ意地悪く笑っている菖蒲丸に、武尊は「ま、まさか、そんなことはない……！」と咳払いをして顔を赤くしている。

「て、店長、花をいただきたい」

「はい、いつも通りですか？」

「いや、今日は大きなものを1つ。4000円くらいで、少々可愛らしいものを。慰霊碑に行っ

てくる」

「……慰霊碑……？」

菖蒲丸の目が武尊を見る。

「あァ。慰霊碑だ。……妹の誕生日にあたる。花の1つも手向けてやりたい」

「墓じゃねエのかよ？」

「墓でもいいんだが、墓に派手な花を供えるのは少々悪目立ちをするのだ。それに、慰霊碑には、最近花が絶えている」

「なるほど」

菖蒲丸はそれ以上言わなかった。武尊も言わない。

互いに『魔力暴走事故の被害者家族』というシンパシーがないこともないが、立場が違う。そして、それに臨む感情も違う。

美桜がせっせと花束を作っているのを2人は見つめていた。『妹』と聞いて、明るめの色をチョイスしているようだ。

「野々宮様、妹さんは何色お好きでした？」

「白……ピンク……その辺りだろうか」

「わかりました」

美桜はカーネーション、スプレーバラ、ユーストマを中心にまとめるらしい。

その様子を眺めていた菖蒲丸は、また複数回咳をする。それを見ていた武尊は尋ねる。

「……サリーフェン卿、風邪だろうか？」

「あァ、かもな……」

適当に頷き返したとき、「あ」と菖蒲丸が店の外へと視線を移す。

「帰ってきたぜ」

ドアベルとともに、ステラが顔を覗かせる。

「ただいま帰りました。無事にお送りいたしました」

「お帰り、ステラ。お疲れさん。助かった、ありがとな」

「お帰り〜」

美桜の元気のいい挨拶に微笑み、ステラは武尊に頭を下げる。

「いらっしゃいませ」

「あァ」

ステラは微笑むと美桜の手元を見た。

「女性の方へのプレゼントです？」

「妹さんのお誕生日だからって」

「そうですか」

すべてを察して頷いたステラは、菖蒲丸の傍へと向かい、しゃがみ込んで下から菖蒲丸を見つめる。

「旦那様」

「あァ」

「奥様から『薬王堂さんの薬を飲ませてください』と」

「な……!？」

「奥様がヘリテージ先生にお出かけ前にお電話してくださって、どの薬を買ったらいいのか教えていただいて買ってきました」

目を見開く菖蒲丸。噴き出す美桜。1人淡々と武尊は「あア」と頷いた。

「薬王堂というと、あの店か……」

「効きますよね～」

ニヤニヤ笑っている美桜に武尊は頷く。

「優良店だ。店主が謎だが、薬は確かだ。仕事が立て込み、なかなか医者にかかれないうちに駆け込むのなら薬王堂に限る」

誰もが太鼓判を押す薬屋なのだが、菖蒲丸だけは首を横に振っている。

「嫌だ……」

「奥様が、そう仰いました。奥様もお加減がよろしくございませんのに、旦那様が奥様にご心配をおかけするようなことをなさいませぬように」

逃げ場がない。実に逃げ場がない。菖蒲丸はふてくされたようにふいっと顔を逸らし、

「……後で飲む」

と口の中で呟いている。

「はい。では、お昼の後に」

ステラは薬を持って2階へと上がっていく。ステラや菖蒲丸、美桜の感覚では、武尊は客の扱いではなくなっていた。ただし、気は許していないが。

ステラはすぐに下りてきた。

そして、美桜の作っている花束を見て「まァ、可愛らしい」と顔をほころばせる。

「素敵なプレゼントです」

「そうだね」

優しい色使いの花束だった。武尊もその花束を見て「素晴らしい」と一言褒める。

「あ、ありがとうございます。喜んでいただけるのが、一番です」

照れ笑いを浮かべ、美桜は花束を武尊に手渡した。

「では、4000円になります」

「あア。これで」

「ありがとうございました～」

元気のいい美桜の声に頷き、武尊は店のドアに手をかける。

「ステラ」

菖蒲丸に言われ、ステラは頷くと武尊の後に続く。

「ありがとうございました」

2人は店を出ると、ようやくまともに互いの顔を見た。

「やっと、ゆっくりお話出来ますね」

「そうだな」

「お忙しそうです」

「いつもだ。……それよりも、ハロウィンなのだが——」

「はい、ご一緒出来るのです？」

期待を込めて見つめられる武尊は、ばつが悪そうに視線を逸らす。

「案内しようと思っていたが、警備に借り出されることになった。休日返上だ」

「そ、それは……残念です」

ステラは僅かに視線を下げる。その様子に、武尊は何かを言おうと思うのだが、なかなか気の利いた言葉が見つからない。「仕事で済まない」という言葉は武尊にはないのだ。ステラもその辺りは十分に承知している。彼の口からそのような言葉は期待していないし、そのような言葉を出させるわけにはいかない。

「でも、お仕事は大事ですから。お疲れのないように」

「ありがとう。……では、また」

「はい」

背を向ける武尊にステラは小さく手を振る。彼が見ていないのは承知しているが、いつも手を振った。いつか振り返ってくれたとき、彼はきっと微笑んでくれる。そう信じている。

そんなステラの様子を、店の中から菖蒲丸と美桜が複雑そうな顔をして見つめていた。

「切ないですねエ～……ステラさん……」

「向こうは仕事人間だからな。ステラも言いてエことが言えねエだろうよ。その上、奴ア特警。……今になっちゃ、ステラの前じゃ言えねエが俺たちの敵に変わりはねエ」

「はい……わかってます」

菖蒲丸はステラが自分の許から去ろうとし、尚且つ、特警に駆け込もうとした事実を忘れてはいない。ステラも、忘れていないだろう。彼女にそれだけの決断をさせるだけの圧力をかけた。けれど、彼女は武尊を選んだ。菖蒲丸も、それを認めた。《組合》は、ステラの動向を常に監視している。彼女が切ない想いに胸を焦がしている姿も、ただ淡々と観察されているだろう。

「……ステラさん……可哀想……」

「アイツを選んだ道だ」

菖蒲丸は咳をして頬杖を突く。

「俺たちじゃ、まともに手は貸してやれねエよ。せいぜい、《組合》が難癖付けたときにフォローしてやるくれエだ。……奴らは『ロミオとジュリエット』だからな」

第2幕 ステラの苦悩

自分たちの恋愛を、誰も祝ってくれはしないのではなかろうか。

ステラは1年ほど前そう思った。間接的にだが菖蒲丸に命を狙われ、武尊に救われて生き延びることが出来た事実がそう思わせていた。

けれど、それから菖蒲丸の傍で働いている。肩書きは変わらずサリーフェン家メイドだ。

だが、すべてが終わった後の菖蒲丸の態度は極々普通だった。すべてがニュートラルに戻った。そう感じる。表面上は、菖蒲丸も美桜も、ステラの恋を応援してくれるが、その実、かなり神経を尖らせているのではないだろうか。特警と関わりがあるという時点で、常に監視され、不審な行動を起こせば《組合》に難癖をつけられる。だが、「ステラの行きたい道を行けばいい」と菖蒲丸が口にしたときから、菖蒲丸から《組合》にステラのことを言うことはなく、《組合》からの電話でいつもステラを庇ってくれている。

いつだったか、ステラは夕食の仕度をしているとき何気なくその理由を訊いた。菖蒲丸は「う～ん」と首を傾げ、

「ここにいる限り、テメエはうちの使用人だろ。使用人のことは主家が守らにゃならねエ。当然のこったな。俺もいろいろと面倒な恋愛に足突っ込んだりしたから、テメエの辛さはよくわかる。周りがとやかく言おうと、本人たちが決めちまったらどうにもならねエもんだ。なら、俺はテメエが楽しく生きられるように守ってやんのが筋ってもんだ。《組合》なんざ知ったこっちゃねエ」

言いながら手際よく出汁巻き卵を作っている。

「そもそも、《人形》を作ってるのは俺だ。テメエまで何だかんだ言われんのはお門違いだってことに気付いてな。それを言ったら、うちの奥方だってテメエと同じようなもんだろ。外から来て、犯罪者の嫁になった。奥方の方はある程度のことを理解してから嫁に来たが、テメエは来てビックリだっただろ。……よくよく考えりゃ、サリーフェンが悪ィんだから、テメエがどんな奴好きになろうが、《組合》が何を言おうが、関係ねエんだよな。だから、テメエは自分の道を歩けばいい。俺は出来る限り応援してやる。出来る限りな」

菖蒲丸は笑っていた。

だから、ステラは菖蒲丸たちに関して不安に思うことをやめた。だが、別の不安はある。それは恋人に関してだ。

武尊は非常に正義感が強く、仕事熱心で、男ぶりもいい。優しさも持ち合わせているし、人間として文句の付けようがない人物である、とステラは思う。だが、彼には足りないものもある。

「……はア」

店に戻り、溜息を吐いたステラを見て、菖蒲丸と美桜は顔を見合わせた。

「ステラさん……？ 大丈夫？」

やんわりと慰める美桜の後ろから、菖蒲丸の声が飛ぶ。

「何だ、酷いこと言われたのか？ 殴ってきてやろうか？」

「……空気読め、病人」

美桜の呟き。ステラは苦笑して首を横に振った。

「何もないです。心配いりません」

使命感に燃えるあまり、彼には振り返る余裕がない。的確に物事を判断出来るが、それは事件に関してのみだ。恋人に関してはその心を慮る余裕がない。ステラが寂しいと思っても、彼には目の前の仕事を一つ一つ解決することがすべてにおいて優先される。

「じゃあ、私はお昼を作ってきます。菖蒲丸様、一緒に上に。お店は冷えますので」

「ステラは優しいな。美桜と違って」

「う」

「どうせ空気の読めねエ病人ですよ、はいはい、悪かった悪かった」

「あうあう～……」

美桜の顔が非常にしょっぱい感じになっているのは放っておき、ステラと菖蒲丸は店の2階の住居へと入った。美桜から離れた途端、菖蒲丸はフラフラとリビングのソファに倒れ込み、突っ伏して唸っている。

「……うう……頭痛エ……」

「奥様は無事に魔界で過ごされていることですから、菖蒲丸様は安心して、こちらで風邪を治してくださいませ。無理に起きていらっしゃるから悪化されるのです」

「あア」

「奥様にご心配でしたら、なおのことです」

「わかってる」

「嘘ではないです？」

顔を覗き込んでくるステラに、菖蒲丸は眉間に皺を寄せ、眉間を揉んだ。

「……平気だ」

「菖蒲丸様……お辛そう……嘘は仰らないでくださいませ」

「気にすんな。テメエが気にするべきは俺じゃねエだろ。……飯の仕度してこい。俺は1人で部屋に行く」

菖蒲丸は立ち上がり、ステラの肩をぽんぽんと叩くと、自室にしている部屋に入るためリビングを出た。

「……菖蒲丸様、私はサリーフェン家のメイドです」

「……」

足を止め、エイズ・サリーフェンの若き当主は頭を搔いた。

「好きにしろ」

言われ、ステラは菖蒲丸の傍へと小走りに寄ると、「手を」と菖蒲丸の手を取った。

「足元が少々怪しくなっておいでです。お熱も高くて。……奥様に伺いました。奥様の傍に寝ずについてらしたそうですね」

「……」

「お疲れが出たのでしょうか？ 奥様はとても心配しておられました」

「……」

菖蒲丸はステラに支えられつつ部屋のドアノブに手をかける。

「……なァ、ステラ」

「はい」

「テメエはよく気が付くなァ……」

「そ、そうでしょうか」

「あァ。使用人の鑑だ」

ドアを開け、ベッドまで辿り着くと、菖蒲丸はとりあえず腰を落ち着けた。ステラは菖蒲丸の着替え一式をチェストの中から取り出し、主人の傍に置く。

「菖蒲丸様、お着替えは——」

「1人で出来る。んな、子供じゃねエんだから」

「……でも——」

「ステラ、テメエがこうやって傅くべきは、俺じゃあねエぞ。野々宮武尊だろ」

言われ、ステラは顔を伏せる。

「い、いえ、私はサリーフェン家のメイドですので、旦那様にお仕えするのが仕事です」

「……仕事は、な。恋人がいるんだから、テメエも主人とはいえ、男と2人っきりになるのは問題だぞ。この狭い家の中で」

「……」

「ステラ、恋人の背中に手エ振って、振り返ってもらったこたァ何度ある……？」

服を脱ぎ、パジャマに着替える菖蒲丸にステラは目を伏せて答える。

「……何度も」

「嘘吐け。……俺の前でまで、我慢して嘘吐く必要ねエだろ」

深い溜息が菖蒲丸の口から漏れる。ステラは菖蒲丸の服を床から拾い集めながら、小さく呟いた。

「……私たちの距離は、縮まりません……」

第3幕 事件発生

武尊は蓮花1丁目にある爆発事故慰霊碑の前で佇んでいた。目の前には、年頃の娘が好きであろう花束が吹き抜ける風にさやさやと揺れている。美桜は慰霊碑に供えると言っても、定番の菊などを一切入れなかった。本当にプレゼントのように華やかなものを作り上げた。心遣いに感謝する。誕生日に辛気臭い花束など誰も受け取りたがらぬだろう。

妹とは、ほとんど会ったことがなかった。武尊は6歳から国立魔法学院本校の中で育ち、魔力がなく一般的な義務教育を受けていた妹とは直接の接点がほとんどないまま終わってしまった。

毎年プレゼントだけは贈っていたし、家族から手紙は何通も届いた。妹からも、学校の話、友達の話、いろいろと手紙で読んでいたが、顔を合わせて話すことはほとんどなかったように記憶している。

それでも可愛い妹であったし、大事にしたいと思ったものだ。

ただ、それを口に出すことはなかった。顔を合わせても妹が楽しそうに話す出来事を頷きながら聞き、通り一遍の返答をする。もっと気の利いたことが言えていればと思うが、それも今更の話となってしまった。

そして、そのまま、武尊は育ってしまった。事務的な会話は問題ないが、人の心を思いやり、その先へ思いを巡らし、心を砕くことを怠ることが多い。

恋愛は事務的な会話ではない。必要事項がそのまま口答で、文面で伝えられるわけではない。不確定な感情という要因は、常に心の中で揺れている。それを恋人に対して的確に表現することが出来る者など、早々いないだろう。

武尊は、そんな割り切れない感情に1年ほど振り回されている。思い悩むと、同じところを堂々巡りする。

恋をした。傍にいたい。時間がない。——ならば、どうするのか。

将来的に、彼女とならば所帯を持ちたいと思うが、そこまでの道程はあまりにも不透明で、適切な《お付き合い》というものの形を踏んでいるのかすら武尊にはわかっていない。男女の間の機微にあまりにも疎かった。

ピピッと短い電子音がヘッドセットのイヤホンを通して聞こえた。特警局からだ。

物思いに耽っていた武尊は我に返り、小走りに局へ戻りながら通信に出る。

「野々宮」

『どこにいる？』

——局長？

通信の主はティリド・ティアード局長である。緊急なのだろうか。

「蓮花1丁目交差点です」

『近いな。蓮花駅ビル1階ショッピングモールで、強盗事件発生。警察車両が走り回っていると思うが、聞こえなかったのか？』

「す、すみません。慰霊碑の結界内にいたもので」

武尊は走り出した。

慰霊碑周辺は雑音が入らない。敷地内の人、物の音しか聞こえないように結界が張り巡らされ

ている。犠牲者の魂が安らかに眠ることが出来るようにとの配慮からだ。

敷地から一步踏み出した途端、耳が劈けんばかりのサイレンの音が街に溢れている。

『現場は駅に近いコンビニだ。犯人は20代前半、男。逃走した犯人をモールの中央部で警備員が挟み撃ちにしたんだが、追い詰められた犯人が暴走』

「暴走?!」

『警備員3人が大火傷で搬送された。本人は自分が発火能力者だと言うことは知らないかったらしい。どうやら、また潜りの魔法使いだ』

「それ以外に被害は? どういった状況ですか?」

『警察は役に立たない。出入り口の封鎖がせいぜいだ。犯人は自分の両手が炎に包まれたことでパニックを起こしてモール内をむやみに暴れまわっている。各商店はシャッターを下ろし、客と商品、店を守っている』

「.....見えました」

駅周辺は規制線が張られ、事態を嗅ぎ付けたマスコミが規制線ぎりぎりまで報道を開始している。

『応援に2人向かっている。しばらくはお前1人だ。出来るか? 相手は超能力者か魔法使いかわからないのだが』

「どのような相手だろうと、任務を遂行します」

出来ないとは言わない。どのような状況であろうと、犯人逮捕が武尊の指名だ。魔力を暴走させている相手ならなおのこと、これ以上の被害は出すことは避けねばならない。

規制線を潜り、武尊はモール入り口へ。

「状況はどうですか」

警察官は早速現れた特警局員に渋い顔をしながら状況を説明する。

「モールの中は火の海だ。ただ、周辺への延焼は防火壁によって進んでいない。」

「わかりました。ご協力感謝します」

武尊はモールの中へと駆け込んだ。

菖蒲丸はベッドの中で体温計を咥えながらテレビを見ていた。傍では美桜が昼食のピラフを食べながら一緒になってテレビを見ている。やたらと特殊車両のサイレンが響いてくるが、何かあったらと思うところで、

「.....ん?」

速報を告げる音の後、テロップが流れる。

「.....『蓮花市蓮花ステーションモールで魔力暴走事故』?!」

美桜は「あわわわ」と残りのピラフを口の中に詰め込むと、テロップの続きを目で追う。

「『犯人は現在、モール内にて特警局員と交戦中。近隣の立ち入りは制限されている』.....か」

体温計が計測終了を知らせる。菖蒲丸は体温計を見てガックリと肩を落とすと、美桜を見た。

「飯食い終わったんなら、ステラと交代しろ。ここに来て言ってくれ」

「ふぁい」

リスのような美桜はもぐもぐしながら、乱暴に置いた皿の上を跳ねたスプーンが、今一度皿にぶつかって音を立てるよりも早く部屋を飛び出していく。ドアが閉まる音が響き、菖蒲丸はそれを合図にケーブルテレビの蓮花市情報の専門チャンネルに合わせた。

「……さて」

間違いなく、武尊は現場向かっているだろう。

ステラによれば、武尊は制圧班で、今回のような厄介な相手に対して立ち向かうのが主な仕事らしい。

だが、頻繁に今回のような大規模な事態は起ころうはずもなく、制圧班といっても、普段はパトロールや雑務がメインだ。それに、特警局自体が警察組織のように細分化されたものではない。ある程度の枠組みの中で局長自らが指揮を執り、フレキシブルに局員を動かすことが出来るのが強みの編制だという。蓮花の局長はキレ者だという噂だ。適材適所に部下を配置していくことだろう。

パタパタという足音。

「し、失礼します！」

ステラの声に「入れ」と菖蒲丸は言い、入ってきたステラに先程まで美桜が座っていた椅子を勧めた。

「知りてエだろ」

「……はい」

ステラは椅子に腰を下ろし、静かに画面を見つめる。

ドン！

テレビから音が聞こえた途端、画面が乱れ、ザッというノイズの後、砂嵐にまみれる。少し遅れて窓の外に駅の方から上がる煙が見えた。テレビ画面にはニュースセンターのアナウンサーが映し出され、現在の状況について早口で説明している。

「！」

息を呑むステラは口を押さえて立ち上がり、ドアに向かって走ろうとした。

「待て！」

体を起こした菖蒲丸の手がステラの手を握っている。

「今行ってどうする?! 二次爆発があったらテメエが危ねエだろッ！」

「でも……ッ！」

ステラは菖蒲丸の手を振り解くが、菖蒲丸は彼女を逃がさなかった。布団を跳ね除け、少々乱暴にステラを腕の中に抱き締める。

「行くな！ 危険だッ！」

「武尊さんがあの場所にいたら……！ あの方に何かあったら……！」

ボロボロとステラの頬に涙が零れていく。

「私は……ッ！」

「悪ィが、俺はテメエの身の安全を最優先で考えにゃならん！ 行くなっつってんだよ！」

バタバタと廊下を走る音の後、バンッ！ と遠慮なく部屋のドアが開かれ、

「菖蒲丸様！ ステラさん！ 駅前で大爆発が——……って、キャ——ッ！」

女子も驚くような甲高い悲鳴を上げ、美桜は顔を真っ赤にしながらプルプルと菖蒲丸とステラを指差す。

「な、ななな、なななななな何してるんですかァああああああ……！」

「ステラが現場に行くのを止めてんだよ……！ こっちゃん死にそうに辛エんだぞ、コノヤロウ……」

菖蒲丸は怒鳴り、そして、そのままベッドに撃沈。

「……菖蒲丸様……？」

ステラは自分の背中を滑り落ちていった菖蒲丸を振り返り、主人の顔を覗き込む。

「菖蒲丸様……？」

美桜と顔を見合わせてから、失礼に当たるとは思いつつ、反応がないため菖蒲丸の体に触れた。とても熱い。そして、揺すっても反応がない。

「またまた、冗談でしょう……？ そういうタチの悪い冗談は」

美桜はステラに代わり、ゆさゆさと菖蒲丸を揺する。それでも、反応がない。

「菖蒲丸様、起きないとお医者さん呼びますよ？」

反応はない。

美桜とステラの顔色が一気に青くなった。

「あ、菖蒲丸様、しっかりしてください！」

「菖蒲丸様ッ！」

「み、美桜様、私はお医者様にお電話します。美桜様はお店の方を——」

「う、うん。わかった。よ、よろしくね！ 菖蒲丸様のこと」

「はい！」

とりあえず、美桜とともに菖蒲丸をベッドの中に押し込み、店の方へ慌てて戻る美桜の背を見送る余裕もなく、ステラはリビングに向かうと菖蒲丸のかかりつけの医者に電話をかける。美桜が刺されたときに菖蒲丸が美桜を連れて行った医者だ。菖蒲丸も嫌々ながら幾度かそこにかかっている。

「……も、もしも、エイズ・サリーフェンでございます……！ ヘリテージ先生はいらっしゃいますか……?!」

ヘリテージ医師は齢70歳になりなんとしている魔界人だ。腕は確かで、菖蒲丸もその腕のよさは認めている。

『換わったぞ。ライリス坊のところのお嬢さんか』

「はい！ 旦那様が高熱でお倒れに……！」

『邸か？』

「いえ、中央大通りのお店です」

『また店か。わかった。すぐに行く』

ヘリテージはそれだけ言うと電話を切った。ステラは受話器を電話機を置く。

——菖蒲丸様はこれで大丈夫。きっと、先生が何とかしてくれる。

心臓が鳴り止まない。

菖蒲丸の部屋に戻ると、ステラは昏々と眠る菖蒲丸に深く頭を下げた。

「申し訳ありません……私は、行きます」

ぽたぽたと涙が落ち、床にいくつも水玉を作る。顔を上げたステラはすべてを振り切るように、店からではなく住居部分の玄関から外に出て、駅に向かって走った。

第4幕 読めない文字

規制線は駅から100メートル以上離れた場所に敷かれていた。野次馬とマスコミ、警察関係、とにかく様々な人々が十重二十重に規制線を取り巻いている。

——……武尊さん……

一生懸命背伸びをしても、ステラに規制線の向こうは見えない。ちらっと見えても、駅のショッピングモールの周辺に何人かの特警局員がいる程度しかわからない。

「ステラさん？」

不意に呼ばれ、ステラは声のした方を向いた。

そこには和服に身を包んだほっそりと病的な男が立っている。女性と見紛うような顔貌には見覚えがあった。

「月之宮夏来様……？」

「こんにちは」

魔法学院本校時代からの武尊の大事な親友で、彼から紹介されてすでに顔見知りである。ステラは小さく会釈した。

夏来はステラの傍に歩み寄り、彼女の耳元でぼそぼそと囁く。

「お待ちしていました。ここはマスコミが多いです。少し離れましょう。武尊から預かったものがあります」

「え……？」

疑問を口にしたステラに小さく微笑み、彼はその場を後にする。ステラも彼を見失わないよう、人々の間を抜け、夏来を追った。

彼はステラを連れて周辺で一番人気のない場所——つまりは、爆発事故慰霊碑までやってきた。周囲の喧騒はまったく聞こえない、ある種の異空間である。人々は駅前の事件に繰り出しているらしく、慰霊碑周辺には人の姿はまったくない。

「おや、可愛い花束が供えてありますね」

「……武尊さんが、妹さんにと供えられたものです……」

「そうですか。そうか、彼女は今日が誕生日だったんですか……まさか、その日にこんなことになるとは……」

苦笑する夏来。ステラが苦しそうに俯くのを見て、「これは、しまった……」と目を伏せる。

「すみません。……あなたに武尊から預かったものを渡さなければ」

袖口に手を入れ、夏来は走り書きのメモをステラに手渡した。

「武尊は病院に向かいました。特警車両に自分から乗っていったので身体的には問題ないでしょう。その際に、私の姿を見つけ、同僚の方伝に僕に預けられたものです」

「……あ、ありがとうございます……」

焦って書いたのか、非常に乱雑な字で綴られた魔界語の文章だった。

『俺は無事だ。多少怪我をしたが、捻挫、打撲程度。犯人も逮捕した。爆発の規模は大きかったが、周辺への影響もほとんどなく、1ヶ月もあれば、すべて元通りになるだろう』

いつも通り、事務的な文言ばかりだ。ステラは内心溜息を吐く。

どうせそれ以上のものはない。そう思って無駄と知りつつ他に何か書かれていないかと余白に目を通す。

「あ……」

あることはあったが、その一文は日本語で書かれていた。

「読めないわ……」

落胆の色の濃いステラの声に、夏来は苦笑を浮かべた。

「私でよければ、代読してあげるけれど」

ステラは黙ってメモを夏来に手渡した。どうせ大したことは書かれていまい。

「それじゃ、失礼」

夏来はざっと中身に目を通し、「やれやれ」と肩を竦める。「こんなだから、いつまで経っても……」と親友に対する呆れに首を振った。けれど、最後の一文を目にした瞬間、「あァ……」と安堵の溜息を吐き、ステラにメモを向けると最後の一文を指差す。

「ここはね、『ただ、ステラ、今すぐ君に会いたい』……そう書かれてる」

「！」

その1行にハッと胸を突かれ、目を見開いて夏来を見つめていた。

「そ、そんなこと、今まで一度も……面と向かって言われたことは……」

「あいつは、そういう男です。面と向かっていけないから、わざわざ日本語で書いた。そして、私に読ませたんですよ」

夏来は真面目な顔をしてステラに告げる。

「武尊は人との付き合い方を知らないんです。だから、仕事以外はとても不器用だ。少し前、酒を飲んだときに君のことを話していました。あの仏頂面の男が嬉しそうに、終始惚気た。私は、そんなあいつを見て鬱陶しいとは思わなかった。むしろ『よかった』と、本当に安堵しました。『人並みに恋が出来るようになったんだ』と。それほど、恋人のことが大切なんだとわかった。けれど、酒の勢いがないと私にすらそんな話が出来ないほど内気で不器用なんです。……あなたにあって、お付き合いさせていただいて、武尊は変わりましたよ。休みをキチンと取るようになっただけでも大きな変化です。それまでは、休みの3回に2回は出勤していましたからね」

夏来はステラの手にもメモを握らせ、彼女の手を優しく包んだ。

「武尊の友人としてあなたにお願いします。どうか、あの不器用な男を見捨てないでやってください。あなたの望む言葉を紡げるほど気が利く人間じゃない。あなたが導いてやってください。どうか、どうか……」

深々と頭を下げる夏来に、ステラは言葉もなく何度も頷き、零れる涙を拭うばかりだった。

店に戻ったステラは、店が閉店していることに驚き、出たときと同じように住居用の玄関へと回った。

そっとドアを開けると、玄関には見慣れない疲れ果てた紳士靴が一足。恐らく、ヘリテージ医師のものだ。視線を上げると、玄関からすぐの階段に美桜が座っており、憮然とした顔をしてステラをじっと見つめていた。帰ってくるのを待っていたのだろう。

「……た、ただいま、帰りました……」

ドアを閉め、恐る恐る頭を下げるステラに、美桜は勢いをつけて立ち上がると玄関先に立ち塞がった。

「心配してたんだからね！」

本気で怒鳴られた。

「どこ行っちゃったんだらうって、本気で心配したんだよ！ 何かあったんじゃないかって、本気で心配した！」

美桜の目にはいっぱい涙が溜まっている。どれほどの心配をかけたのかわからない。『《組合》がステラに危害を与えたのではないか』と、美桜はずっと心配していたのだろうか。

「すみませんでした……」

頭を下げるしか出来ないステラに、美桜は言う。

「……無事なら、よかったよ……」

それが本音だろう。美桜は服の袖で涙を拭くと、

「ステラさんが帰ってきたなら、お店開けてくる。5時にお客さんあるし」

言い残して店の方へ行ってしまった。

家に上がり、スリッパを突っかけて菖蒲丸の部屋へと向かう。菖蒲丸はどうしただろうか。酷い熱の主人を置いて、ステラは飛び出してしまった。使用人としてあるまじきことだ。

菖蒲丸の部屋のドアは開いていた。中からヘリテージ医師の声が聞こえる。

「疲労でガタが来たところで風邪にやられただけだ。少々養生せい。栄養剤打っといたぞ。明日には少し楽になる」

「……あア」

「じゃ、ワシは帰る」

菖蒲丸の声がして、ステラはそっと室内を覗く。だが、運悪く横になっている菖蒲丸と思い切り視線がぶつかった。

「ステラ」

菖蒲丸は少々不機嫌な顔をして手招きする。ヘリテージ医師は荷物をまとめ始めた。診察などは終わったらしい。

「先生が来たとき、テメエいなかったらしいなア？」

「……はい」

「美桜が『ステラさんがいない～！』とかギャアギャア騒いでるときに目が覚めた。先生にぶん殴られてたぞ」

「……はい」

「……特警の奴ア、無事だったか」

「……はい」

「ならよかったな」

菖蒲丸からはたったそれだけ。荷物をまとめたヘリテージ医師は、

「薬王堂の薬を飲ませとけば直る。それで充分だ」

菖蒲丸の枕元にある、袋を開けるとシナモンとクローブとジンジャー、八角の混じったような

匂いのする薬を指差した。

「わかりました」

ステラは頷き、ヘリテージ医師を玄関まで送ろうとしたのだが、

「いや、いい。この我が侂坊主の傍にいてやれ。奥方が実家に帰って寂しくて泣くかもしれん」

「ジジイ、コノヤロウ……」

「何かあったらまた電話を寄越せ。次はベッドを用意して診療所の病室で待っててやる」

「絶対行くか……！」

凄んでも気合が足りない菖蒲丸の言葉を一笑に付し、老医師はドアを潜る。

「ありがとうございました」

ステラは深々と、ヘリテージ医師がドアを閉めるまで頭を下げていた。

「……」

反省しなければならないことは多々ある。だが、行動しなければ手に入らなかったことも多々ある。

武尊はステラが現場に来ることを信じていたのだろうか。そうでなければ夏来にメモなど話しはしないだろう。

——言わなければ、わからないことばかりだわ……

「よっ、と……」

菖蒲丸はベッドから体を起こした声を聞いて、我に返ったステラは顔を上げ、小走りに駆け寄る。

「……菖蒲丸様、お寒くは？」

「大丈夫。心配すんな。……汗かいた。着替える」

「ご用意します。少々お待ちください」

バスルームから熱めの湯を張った洗面器とタオルを取ってくると、主人の着替えを準備する。

「体をお拭きします」

手が赤くなるほど熱い湯でタオルを絞り、パジャマの上を脱いだ菖蒲丸の背中を拭っていく。

「前は自分で拭く」

「はい」

ステラは一度タオルを洗い、再びよく絞って菖蒲丸に手渡す。

「悪ィ、シーツも換えてくれ」

「はい」

菖蒲丸は特に何も訊かない。何を言うほどの問題でもないとも言いたげに、パジャマを着替え、ステラがベッドメイクをしている間、ニットガウンを羽織って椅子に座り、窓の外を眺めていた。

ベッドメイクの仕上げに枕からカバーを外し、換えのカバーを枕にかけて、角が綺麗に出るよう、きちんと折り込んでいたステラに声がかかった。

「ステラ」

「はい」

「ニュースでやってたが、テメエの恋人は大したもんだ。実際は奴も含めた3人がかりだったら

しいが、犯人から暴発しかけたエネルギーを、モールの出口に向けて誘導させた結果があの爆発らしい。相当量の魔力の奔流の中で、よく分散させずに1ヶ所にまとめたもんだと思ったぜ。...
...あの爆発のとき、犯人が自分の魔力でぶっ飛ばないように、外から圧もかけてたっていうんだからな。.....初めて特警がすげえと思った」

「そうですか」

枕を置き、ステラは小さく微笑む。それを見て、菖蒲丸も笑った。

「あア。奴を少々見直した」

菖蒲丸はメイクが終わったベッドに腰掛けると、ステラを見上げる。

「美桜は怒っただろ」

「はい」

「本気で心配してた。.....それは、俺もだ」

「申し訳ありませんでした.....」

「.....」

菖蒲丸は頭を搔き、ステラを見上げた。

「無事なら、それでいい。他人に止められるもんじゃねえもんな」

熱で疲れた顔をしている菖蒲丸に、ステラは大きく頷いた。それを見て、「そうか」と菖蒲丸は微笑み、

「よかったな」

と、兄や父のような慈しみを持って、大きく頷いた。

第5幕 幸せの始まり

10月31日午後5時。

花屋の前には《closed》と書かれた札を頭に載せた巨大カボチャがあった。蝋燭の灯りがカボチャの中で揺らいている。周辺の店も同様の飾りつけをしているが、サイレント・グリーンのカボチャは一線を画したインパクトでもって鎮座していた。

私服姿の野々宮武尊は、カボチャを避けつつサイレント・グリーンのドアを押した。最早聞き慣れたドアベルの音が耳に心地良い。

奥に銀髪の男がいる。いつも通り、コーヒーを飲みながら新聞を繰っていたところだったようだ。

「よう、らっしゃい」

「お招きにあずかり光栄だ、サリーフェン卿」

「どういたしまして。……ステラの頼みじゃ無碍にや出来ねえからな」

武尊は休暇中だ。——というよりも、警備に当たれないため休暇となったという方が正しい。

「旦那様、うちは花屋です。魚屋とか八百屋じゃありません。ちゃんと『いらっしゃいませ』って言ってくださいよ」

呆れた視線を向ける美桜に、菖蒲丸は「うるせえな」と、作業台の上に手をつけていた美桜の指先に、少々勢いをつけて愛用のマグカップを降ろす。

「イ……ッ！」

手を抱えて蹲る美桜に、

「ああ～、すまんすまん」

と、わざとらしい棒読みで謝り、菖蒲丸は作業台の上に広げていた新聞を畳む。

「松葉杖が放せねえな。2週間経つだろう」

「非常に困っている。書類仕事しか出来ん。警備などもっての外だ。局長から直々に休暇をいただいた手前、無理に出勤することも出来ん」

「ステラには捻挫とか言ったんだってな」

「うむ。だが、実際検査をしたら骨にヒビが入っていた。暴走した魔法使いと俺1人でやり合うのは初めてのことだったからな。増援が到着するまで、かなり無理をしていたようだ」

「……暴走した魔法使いとガチって生きてる方が俺にとっちゃ脅威だぜ」

「褒めているのか」

「モチロン」

菖蒲丸は不敵に笑い、まだ蹲っている美桜の頭を乱暴に撫でると「ステラ！」と呼ぶ。

「彼氏が来たぞ！」

「聞こえております。旦那様」

花が満載されている冷蔵庫の中からステラが出てきた。武尊を見てニッコリと微笑む。

「いらっしゃいませ。今日はお越しいただきありがとうございました」

「あ、あア……」

武尊は落ち着かなげに頷き、

「土産だ」

と持っていた大きめの紙袋をステラに差し出した。ステラは紙袋の中を見て、「まァ！」と顔を輝かせる。

「カフェ・フリーズのケーキはとても美味しいんですよ！ カフェ・フリーズは御得意様で私、よく配達に行くんです。帰りによく買わせてもらっています。旦那様も美桜様も甘い物が好きですし。私も大好きです」

「ならば、よかった」

「いいチョイスだ。……上がれよ。ステラも一緒に上に行って、茶の1つも出してやれ」

「はい、旦那様。……武尊さん、玄関の方から上がってください」

「わかった」

ケーキを下げたステラは、武尊の前を歩く。店のドアを開けて武尊を先に出すと、菖蒲丸と美桜にこれ以上はないと思えるほどの嬉しそうな笑顔を見せて、武尊とともに玄関へと回った。

2人の姿が見えなくなった途端、菖蒲丸は至極真面目な顔をして美桜を見る。

「……ヤバイもん、全部隠したよな？」

「たぶん……。昨日、3人で一緒に隠したじゃありませんか」

「だよな……。ガサ入れに来たんじゃねえよな？」

「たぶん……」

抑えられない疑心暗鬼。見張りたいが、美桜はお菓子と一緒にミニブーケをハロウィン行列の人々に渡すためまだまだ作業が残っているし、菖蒲丸はステラと武尊の会話に入りたくはない。

「……大丈夫、きっと大丈夫」

呪文のように呟くと、菖蒲丸は店の隅に積まれていたオモチャカボチャを大きな籠に入れ、店の入口付近に置く。

「美桜、これも一緒に配っちまえよ」

「は〜い」

店内でそんな会話が交わされているとも知らず、ステラは店の裏手にある玄関を開けた。

「どうぞ」

「すまない」

「2階まで、上がれます？」

「その程度なら問題ない。……失礼する」

松葉杖の先端を拭い、玄関を上がる。

「ここに入るのは2回目だが、上がるのは初めてだ」

「そうですね」

ステラは階段を2段上がり、武尊を振り返った。

「少々急なので、足元気を付けてくださいませ」

「あァ、そうだな。段差が高い」

一步一步、武尊が階段を上がるペースに合わせ、ステラは後ろで彼を支えながら階段を上って

いく。

上りきった武尊は「こちらにどうぞ」とリビングに通された。昨日ステラが「どいてください！」と美桜と菖蒲丸を蹴散らしながら必死に掃除した成果が現れている。いつもなら、美桜が食べ散らかしたお菓子の袋が必ず1つは落ちているのだが、今日は袋どころか塵1つ落ちていないのではないかとと思われるほどに綺麗だ。

「ケーキを冷蔵庫にしまってください。お茶をお淹れしますので、座ってお待ちください」

キッチンに向かったステラを見送り、武尊は室内をぐるりと見回した。

「……特に何もない」

武尊本人は、菖蒲丸が《人形師》か《調教師》、もしくは《傀儡》ではないかと未だ疑っている。初めて室内に通されたゆえ、その辺りの証拠が1つでもないものかとざっとでも見回してしまうのは仕方ないことだろう。それが予想出来たからこそ、菖蒲丸はステラに蹴散らされた後、危ないと思われる物は、すべて自分の部屋に隠してしまった。現在、菖蒲丸の部屋は混沌としている。物置状態だ。

武尊が職業病を発症し、一通り見回して気も済んだ頃、キッチンからステラが戻ってきた。

「お待たせしました。ケーキはお夕食の後で、旦那様と美桜様と一緒に、みんなでいただきますよう」

「そうだな」

ティーセットがテーブルの上に置かれる。鼻をくすぐる香りは夏摘みダージリンの馥郁としたマスカット・フレーバーだ。

ステラは迷わず武尊の隣に腰を下ろし、紅茶をサーブした。

「お口に合えばよいのですけれど」

「問題ないだろう、ステラの——」

武尊が自分の方を向くのを待っていたのだろう。ステラは武尊の手を少し自分の方へと引いた。何事かという顔をした武尊の目の前、ほんの数センチ先にステラがいる。そう思った瞬間、ステラの唇が武尊の唇を塞いでいた。睫が触れるほどの距離だ。驚きのあまり、思考も動きも止まる。

数秒のキスの後、「あら、口紅が」と自らのハンカチで武尊の口元を拭い、彼女は悪戯に微笑んだ。

「な、な……にを……」

慌ててそれ以上の声もなく、武尊は耳まで赤くしている。そんな彼の様子を見て「うふふ」と声を出して笑ったステラは、

「行動することを覚えました。想うことは大切ですが、言葉に、行動に出すことがどれほど大事か、私は教わりました」

と、告げる。

「だ、誰に……？」

訊き返す武尊。ステラの指が、武尊の唇に触れた。

「あなたに」

そして、武尊に抱きついた。

「……あなたを愛しています。ですから、どうかあなたの傍に置いてください」

どんなに茨の道を歩こうと、ステラにはそれしかない。「この人のためなら生きられる」と思う。武尊が逡巡するのなら、言葉に出せないのなら、ステラが武尊に自分の想いを知らしめるしかない。「どうか武尊をお願いします」と頭を下げた月之宮夏来の想いも飲み込んで、ステラは決心したのだ。

「武尊さん、愛しています」

呆然としていた武尊の腕が、ゆっくりとステラの背に回る。

「……ありがとう……ステラ」

武尊の腕に力が籠る。すべてを求めるように掻き抱かれ、ステラの頬に嬉し涙が零れていく。

「約束する。傍にいる。君の傍にいよう。ずっと」

ステラの柔らかい髪に顔を埋め、武尊は今更のように呟いた。

「……そうか……そう言えばよかったのか……」

「ええ。……何でも言ってください、あなたの言葉がもっともっと聞きたいです」

ステラは指先で涙を拭くと、幸せそうにニッコリと笑った。

「紅茶、冷めるな……」

「……どうしましょう、どのタイミングで入ります？」

「俺に訊くなよ」

菖蒲丸と美桜は顔を見合わせ苦笑を交わす。

「これはこれで、幸せな始まりだろ」

「ですね。……あ、『Trick or treat!』って言って入ります？」

「そりゃ、空気の読めねエダメ人間のするこった」



エイナ

昔蒲丸が密かにステイラを想っていたことなる。
エイナは知っていた。

PHOTO Encycloreorder
<http://encycloreorder.jp/>

第1幕 カフェ『マダム・オディエ』

国立魔法学院蓮花校。

「いらっしゃいませ～！ あ、ステラさん！」

「こんにちは」

雑賀修治が菖蒲丸との口約束を反故にしたことに端を発した一連の事件の終幕から1年。

世の中は何事もなかったかのように回り、まもなくハロウィンを迎えようとしている。

「頼まれた物をお届けに来ました。さっき届いたので」

「はい。……あ、エイナの奴、呼んできますよ」

「い、いえ、忙しい時間でしょうし……」

「大丈夫ですよ。声かけないと、こっちが怒られるし」

ステラは『マダム・オディエ』というケーキの美味しいカフェに注文されたオモチャカボチャを届けに来ていた。食べられない観賞用のカボチャで、形が面白かったり、ツートンカラーだったりという、確かに鑑賞に堪えうるものである。

カフェのホール担当の男性はステラからカボチャを受け取ると笑って奥へ引っ込み、コックコートの方——ステラの自称・恋人であるエイナという長い髪を後頭部でまとめて団子にしている青年を呼んできた。『マダム・オディエ』で働き始めて10ヶ月ほどになるろうか。パティシエとしての腕と、特殊な出自を小説家でもあるオーナーのマダム・オディエ男爵夫人に殊の外気に入られ、非常に可愛がられている。エイナ自身の人当たりも良かったため、学院にもすっかり溶け込んでしまった。顔を覗かせたエイナは、そこにステラがいることを確認するとちょこちょこ店の入り口まで出てくる。

「やほ～。ステラさ～ん」

「こんにちは。お忙しい時間じゃなかったんです？」

「大体終わったよ。だって、そろそろオープンだし。もうすぐ11時になるでしょ」

言って、店内の時計を確認し、「だよね」と1人頷く。ステラは先程対応してくれたホール担当の男性がカボチャを店内に飾っているのを見ながら不思議そうにエイナに尋ねた。

「カボチャなんですか。去年から不思議には思っていたんですけど、10月31日ってカボチャを飾るんです？」

ハロウィンというものは魔界にはない。ステラは勝手に『カボチャを飾る日』と思い込んでいたようだ。

「何でそう思うのさ？」

「この季節、ここのお店もそうですけれど、カボチャのお菓子とか置物とか、とっても多いじゃないませんか。お店の方も、カボチャの入荷が増えますし」

「あ～、言われてみるとね～」

エイナは「さもありません」と言うように頷いている。

「でも、俺も詳しいこと知らな～い」

「そうなんです？」

「そうなんです～」

エイナはニコッと笑う。

「ね、ね、ステラさん。今日の夕方は——」

「旦那様と美桜様が18時から遊びにいらっしゃるって。3日前にお約束しましたよ？」

「あ、そうだった！ 遊びに来るって言ってたっけ！」

「はい」

ステラは笑ってエイナを見た。

「楽しみですね」

「うん、そうだね」

「旦那様たちにお会いするのは、どれくらいぶりかしら。……じゃあ、また後で」

ステラは手を振って、学院内の住宅街にある店舗兼自宅へと戻っていった。

「……はア」

エイナは複雑な笑みを口の端に浮かべ、ステラの後姿を見送ると厨房へと戻った。

ステラのことが好きだ。大好きだ。愛している。エイナの一方的な一目惚れから始まった恋だった。いろいろと紆余曲折を経て一緒に住むことになったが、未だにベッドルームは別だし、キスもしていない。

大好きな彼女は、自分をどう思っているのだろうか。

エイナは考える。1年前の自分であったら、彼女が何を考えていようが自分勝手に行動し、すべてを壊し尽くしていたに違いない。けれど、今は違う。人と積極的に関わるようになって、人の心を少しずつ感じる事が出来るようになった。仲のいい人も出来た。特にカフェの人々はエイナを優秀なスタッフと認め、戦力として一目置いてくれている。学院生も然り。話の通じる気安い兄貴分として慕ってくれている。

けれど、彼女の心はわからない。未だに菖蒲丸と美桜に会えるとなると、普段一緒にいるときよりも遥かに幸せそうに微笑んでいる。

——寂しいけど、我慢。

そうして何度自分に釘を刺しただろう。菖蒲丸の調整のおかげで以前のような狂気は顔を出さなくなったが、その代わり、男として好きな女に対する独占欲が生まれた。「自分の傍にいてほしい」とそれだけを願うようになった。

菖蒲丸たちに会って嬉しそうな彼女を見るのは、自分も嬉しい。しかし、男心はそれを素直に喜べないのだ。

「エイナ、明日の仕込み」

「あ、はい、シェフ！」

忙しいのはいいことだと小麦粉を量りつつ苦笑する。それだけを考えればいい。今は仕事だけを考えればいいのだ。

第2幕 友人と恋敵

学院の鐘楼が高らかに18時を告げる。私服の学院生たちが夕食を摂りに来る時間帯だ。彼らは基本的には寮で食事をするのだが、寮の食事は予約制であり、頼み忘れたら外で食べるしかない。あえて外で食事する生徒もいるが。

「お疲れさん！」

「お先に失礼しま〜す！」

ディナータイムに入ると、エイナの仕事は終わる。彼の仕事はケーキやパンの仕込みや仕上げだ。料理関係は軽食程度なら作るのだが、ディナーのようにきっちりとした料理までは仕事に入っていない。ディナーに出すデザートを作り、明日の仕込みをしてしまえば、仕事は終わる。

外はもう真っ暗だ。冬至に向けて、日はどんどん短くなっていく。

カフェや普通の店が立ち並ぶ商店街から住宅街は少々遠い。区画が違う上に、エイナとステラが住む家は住宅街の外れだ。

カフェの駐輪場に停めてあったMTBに跨り、エイナは自宅へと向かう。街灯は明るい。魔力で光る熱くない光は暖かい色を学院内に提供している。

「あ、エイナ！」

大きく手を振る人影に、エイナはMTBに乗ったまま片手を離して手を振った。

「美桜〜！」

そして、少々スピードを上げてから、ブレーキをかけつつ、わざと美桜に向かって突っ込んでいく。美桜はあわあわと大袈裟にも見える様子で、両手をバタバタさせながら慌てている。

「あわわわわわわわ！」

「わ〜、あぶな〜い」

心のこもらない注意喚起を叫びつつ、美桜の直前で思い切りブレーキレバーを握り締める。

「ひィ——！」

間の抜けた美桜の悲鳴が辺りに響いたのと同時に、美桜とエイナの頭が叩かれた。

「イダッ！」

「イテッ！」

「テメェら、うるせエ」

美桜とエイナが揃って声のした方を向けば、眉間に皺を寄せた菖蒲丸が突っ立っている。

「あ、菖蒲丸……」

「菖蒲丸様、痛いです……」

「うるせエ。近所迷惑だ。エイナ、悪ふざけも大概にしろ。美桜もいちいち大袈裟過ぎる。いっそ轢かれちまえ」

「ヒ、ヒドイですウ〜！」

泣きつく美桜の頭を向こうへ押しやりつつ、菖蒲丸はエイナを見た。

「よう」

「こんにちは〜」

ニコリと微笑むエイナに、菖蒲丸はどことなく不機嫌そうな顔をしている。

「どうしたの～？ 久しぶりにステラちゃんに会うのに」

「ステラに会うからこんな顔してんじゃねえよ」

菖蒲丸が密かにステラを想っていることをエイナは知っている。それは随分前から気付いていたことだった。ステラを見つめる菖蒲丸の視線は優しい。言葉に出せない分、視線に無言の想いがこもる。そんな菖蒲丸の想いを知ってか知らずか、彼女はエイナと暮らすことを選んだ。成り行きでそうなったと言えるかもしれないが、いつだって嫌ならば逃げることは出来たはずだ。学院内ならエイナの立場は守られるし、エイナ自身、独りで生きていこうと思えばどうにでもなるほどの人の繋がりを作った。

けれど、ステラはエイナを見捨てなかったし、エイナも菖蒲丸にステラを渡すつもりはなかった。

「入れば」

広いというほどではないが、趣味よく整えられた庭にMTBを止め、店舗2階に当たる自宅への階段を駆け上がる。

「ただいま～！」

そうだ。「ただいま」と告げられるのは同じ家に住んでいるからだ。後ろから菖蒲丸と美桜が続いた。

「おかえりなさ～い」

奥から声がある。そして、ステラが顔を出した。

「あら、菖蒲丸様と美桜様と一緒にだったんです？」

「うん。下で会った～」

靴を脱ぎ、スリッパを突っかけると、来客用——ほとんど菖蒲丸と美桜用のスリッパを玄関先に出す。

「どうぞ」

「お邪魔しま～す」

美桜は早速スリッパを履いて、トコトコと勝手知ったる他人の家へ入っていく。菖蒲丸はどうにも不愉快そうな顔をしてスリッパを突っかけ、廊下をダイニングへ向かった。

「よう、ステラ」

「菖蒲丸様」

ステラは入ってきた菖蒲丸に微笑む。

「お久しぶりです」

「あア」

菖蒲丸が久しぶりに見るステラは、1年前に店に来たときとは違う服を着ている。メイド服を着ていない。住宅街にある服屋で買ったのだろう、極一般的な魔界人の服装をしている。

「自分には見せてくれなかったその姿をここで毎日エイナに見せているのか」と言いかけて、それを飲み込むように苦笑いを浮かべると、菖蒲丸は頭を掻いた。

「元気か？」

「はい。1ヶ月ぶりくらいですね、お会いするの」

「あア。……心配してる」

「大丈夫です。皆様、とてもよくしてくれます」

「そうか。何かあれば、すぐに言え」

「はい」

盗み聞きしながら、菖蒲丸の言葉の裏に潜む想いに歯噛みする。ステラはいつになったら自分を見てくれるのだろうか。菖蒲丸や美桜と同じように、エイナと向き合う日は来るのだろうか。

「エイナ～、このチョコ食べてもいい～？」

何にも考えていないような美桜の声に脱力しつつそちらを見ると、カフェでもらってきたチョコレート箱の箱を頭の上に掲げて美桜がキラキラした目をエイナに向けている。

「飯の前にお菓子を食べるな～！」

「わ～ん！ エイナが意地悪言う～！」

美桜に怒って、ステラが途中でやりかけている夕食の仕度を引き継ぐ。テーブルの上に皿を並べるだけだから、エイナでも出来ることだ。

「美桜、テメエはどこにいてもうるさい」

「ヒド！ 菖蒲丸様、ヒドイ～！」

「そういうやりとりを聞くの、本当に久しぶりです」

笑うステラは菖蒲丸と美桜の背を押す。

「はい、座ってくださいね。菖蒲丸様。美桜様。今日は魔界料理を作りましたから」

「お、魔界料理は久しぶりだ」

「僕は最近あんまり食べたことないから、嬉しいな～」

「エイナも、座って。今日もお疲れ様でした」

「うん」

これが日常になって1年弱。

菖蒲丸たちと暮らした数ヶ月よりもずっと長くなったエイナとの生活は、ステラに新しい人間関係を作っている。菖蒲丸たちといたときよりも、ずっと広く人と付き合っている。魔法学院は特殊だが、知り合えるであろう人は外にいるときよりもずっと多い気がした。それは、人物の多様性もあるかもしれない。

「ステラ、酒」

「はい、菖蒲丸様」

ヒクリとエイナの頬が引きつる。使い方が堂に入っていた。いろいろと癪に障るが仕方ない。

「ねエ、エイナ。お仕事楽しい？ 今、どんなことしてるの？」

子供のように目を輝かせて話をねだる美桜に、エイナは「そうだな～」と顎を掻きつつ答える。

「今はカボチャを使ったタルトとか、クッキーとか、そういうの作ってるな～。ハロウィンだから」

「ふ～ん。カボチャ売れるよね～」

「売れるよな～」

エイナと美桜の暢気な会話が食卓の上を流れていく。菖蒲丸は酌をしているステラに訊いた。

「テメェはどうだ？ 何か変わったこととかあったか？」

「特にはありません。お花も順調に売れてますし、私も体を壊すこともなく元気ですし」

「そうか」

「菖蒲丸様は？ 何かありました？」

「俺は……縁談があったくれエだな」

「あら、おめでとうございます」

ニコッと微笑むステラに、菖蒲丸は微妙な微笑みを返す。そこに、

「ステラさん、菖蒲丸様ったらね～、『縁談なんて嫌だつってんだろ！』って、お邸の人とケンカしたんだって」

ヘラヘラした美桜の声が挟まった。ステラは「あらまァ！」と菖蒲丸を見つめている。

「そんなこと、よろしくはないと——」

「だって、菖蒲丸様ったら、ステラさんをお嫁さんにしたいんだもん」

ステラの目が真ん丸に見開かれ、美桜を振り向く。いくら口が軽い美桜とはいえ、今、この場でそんな話をするはずがない。

「美桜、テメェはペラペラと——！」

睨んだ菖蒲丸だったが、ガックリと肩を落とした。視線の先には酒に飲まれてイイ気持ちになっている美桜がいる。真っ赤な顔をして笑っていた。どうやらエイナがうっかり飲ませたらしい。エイナはエイナで聞きたくもない話を聞かされたが、それは自分のミスだ。鬱憤をぶつける場所がない、そんな顔をしている。

「酔っ払いの戯言だ」

鼻で笑い飛ばし、菖蒲丸はグラスを開けた。

第3幕 言えないこと、訊けないこと。

この話は、ここで一端打ち切りとなったのだが、食事が済んで美桜が床で器用にうつ伏せで「うお、死体」とエイナに呟かせる様子で寝てしまった後、ステラが食事の片付けをしている間、リビングでは菖蒲丸とエイナが睨み合う事態となっていた。

「アンタ、まだ諦めてなかったの〜？」

「何を？」

「ステラさんのこと」

ステラに聞こえないように小声で話しているのだが、互いの言葉にかかる凄みは消えることはない。

「アンタに魂に鍵掛けられてなきゃ、今まさにブスリとしてる可能性大なんですけど〜」

「ステラに泣かれてもいいなら、そういうバカなことを口に出してりゃいい」

「……」

チッ、と舌打ちが聞こえる。そういった行為が愚かであると学んでしまったエイナには返す言葉がない。

「諦めるとか、諦められねえとか、そういった次元の話じゃねえんだよ。……ステラがどうすんのかハッキリ決めねえ限りは、心配で心配で俺のことなんざ手につかねえ」

「どういう意味」

「ステラがテメエを選ぶのか、それとも、テメエが落ち着いた今ここから外に出るのか、それを決めねえ限り、俺は自分のことなんざ決められねえってこった」

「何でさ」

「ステラがテメエを選べば、俺だって縁談の1つも受けるさ。フェリシア卿からの勧めでもあるからな。だが、ステラがテメエを選ばなかったら、俺はステラを貰い受ける。元々はそういう話だった」

「へ〜。朱理はそれを知ってるの〜？」

気を抜くと美桜が嫌がる昔の呼び方が口をつく。「しまった」と口を押さえたエイナだが、美桜は寝ている。聞かれてはいなかったようだ。

「美桜には、後から話した」

「ふ〜ん」

キッチンからステラの鼻歌が聞こえてくる。機嫌がいいらしい。菖蒲丸は溜息を吐いて「こんな話をしに来たんじゃねえ」と自分を戒めると、真面目な顔をしてエイナを見た。

「……エイナ。実際問題、テメエはどうしてえんだ。ステラとずっと一緒にいてえのか」

「え」

「『え』じゃねえよ。……今日、俺がここに来たのはそれを確認するためだ。テメエとステラがここで生活を始めて1年経とうとしてる。合わねえなら、それでもいい。上手く行きそうなら、それでもいい。《組合》はテメエらを監視してる。どっちかハッキリさせとくべきだ」

選択権を与えてくれた菖蒲丸にエイナは驚きを持って向かっている。菖蒲丸はいつか自分からステラを盗ってしまうと信じて疑っていなかった。だが、こうして選択権を与えられると、逆に

これからに対する別の不安が生まれ、エイナは俯くしか出来ない。

「俺は、俺はね、菖蒲丸。ステラさんとずっと一緒にいられたらって思う」

「あア」

「でも、ずっと考えてたことがあるんだ。ステラさんが成り行きでここに来たときそのまま、俺と一緒にいるだけだったら、俺はどうするんだろうって。……今の仕事は楽しいし、何かあったとしても、仕事があるから何とかやっていけると思う。……でも、それは悲しい」

「だろうな」

相槌を打った菖蒲丸をエイナは上目遣いで見た。今日の前にいる菖蒲丸は、恋敵ではなく、ステラの保護者のような顔をしている。だから、甘えた。

「……ねエ、俺から訊くのはちょっとアレだから、アンタから訊いてくれる？」

「はア～？」

「頼むよ～」

パン！ と顔の前で手を合わせるエイナに、菖蒲丸は打って変わって非常に嫌な顔をした。保護者的立場で、ある意味第三者的な意見を言うだけならいいが、好いた相手になぜそんなことを訊かねばならないのか。だが、菖蒲丸にも魔界での対外的な付き合いというものがある。そういう部分では貴族なのだ。身を固めるべきだと周囲が進言したら、それに従わねばならないときもある。二連続の手痛い失恋は、すでに魔界の本家の知るところとなっている。

気が進まないが、とにかく進むにしろ戻るにしろ、ここは菖蒲丸の正念場でもあるのだ。

「……わかった。ステラと片付け交代しろ。ステラ呼んでこい」

「は～い」

エイナは立ち上がり、「頼むからね～」と菖蒲丸に言ってからキッチンへと向かった。

残された菖蒲丸は苦虫を噛み潰したような顔で前屈みになりつつ顔を両手で覆う。彼がステラと一対一で向き合うのは本当に久しぶりだった。

「……何を言うべきか……」

小さく呟き、自分の中で考えをまとめる。しかし、早々にまとまるものでもない。「う～ん」と唸っているところにステラが戻ってきた。

「菖蒲丸様、どこかお悪いんです？」

「は？」

それこそ素の表情で顔を上げる。ステラが心配そうに菖蒲丸を見つめていた。

「唸ってらしたので」

「あ、あア、問題ねエよ」

「なら、いいのですけれど」

「座れ」

「はい、失礼いたします」

ホッと安心したようにニコッと微笑むステラは、相変わらず清楚で美しい。庶民とはいえ、美男美女揃いのフェリシア家の傍流である。前はメイド帽の中にしまわれていた薄茶色の髪が肩に零れる様子は可愛らしい。

「……なァ、ステラ」

「はい」

「……う、う～ん……」

「やっぱり、どこかお悪いんです？」

「違うっての。……ステラ、テメエはエイナをどう思ってんだ。これから先、どうすんだ」

「……これから、ですか……」

ステラは菖蒲丸を見つめている。真っ直ぐに見つめている。その視線を受け止められず、菖蒲丸は僅かに視線を逸らした。

「そうだ。これから先の話だ」

「今の生活は悪くありません。……菖蒲丸様、御縁談があるならば、そちらを優先して——」

「出来ねェから言ってんだ」

髪を指で梳き、菖蒲丸は覚悟を決めたような口調で言った。

「ステラ、俺はテメエをフェリシア卿から預かった。フェリシア卿は俺を信頼して行儀見習いにうちに寄越したんだ。……こんなことになって、テメエは長いこと中途半端な状態にいる。テメエが心配だから言ってんだ。これでいいのか？」

菖蒲丸は「よし」と姿勢を正し、真っ直ぐにステラを見つめる。

「ステラ・フェリシア」

「は、はい」

改まった口調で呼ばれ、ステラも反射的に背筋を伸ばす。

「ライリス・エイス・サリーフェンとして、雇用主として尋ねたい。エイナとここで生活をするのか、それとも、ここを出て、サリーフェンとフェリシア、両家の橋渡し役として私と婚姻を結ぶか。決めてもらいたい。急なことで悪いが」

それを受けてステラはニッコリと微笑んだ。

「旦那様には、とてもよくしていただきました。とても感謝しております。昨年——数ヶ月でしたがお店で働いている間、本当に楽しく過ごすことが出来ました」

「あァ」

「旦那様」

「何だ」

「美桜様が仰っていらしたこと、本当なんです？」

「そんなことはない、安心してほしい。私はステラの幸せのみを願う」

苦しい心の内を隠すのは慣れている。菖蒲丸は笑うとステラに言った。

「だから、ステラがエイナを選ぶのに二の足を踏んでいるのなら、大丈夫。エイナはきちんとお前のことを愛している。心配することはない。エイナはうちの使用人の1人という前提で、ステラの両親にはフェリシア卿からお話していただいた」

「本当です？ ……よかった……それだけ、心配だったので。お父様とお母様にどう説明しようか悩んでおりました」

「成り行きでここに住むことになってしまった。申し訳ないことをしたと思っている……私を恨んでいるか？」

「いいえ。……貴重な体験をさせていただいたことを感謝するばかりです」

「……そうか」

「旦那様」

苦笑する菖蒲丸に、ステラは微笑んだ。

「……私は、エイナとここにおります」

彼女の目から涙が一筋流れるのを、菖蒲丸はただ見つめていた。

第4幕 いろいろな愛の形

やんわりとした決別だった。

ただ、それで絆が切れたわけではない。家族のように接すればいいだけだ。

起きない美桜を置いていくわけにいかず、菖蒲丸はソファを寝床にすることにした。明日は学院店も中央大通り店も定休日だ。ステラが「私のベッドを使ってください」と申し出てくれたのだが、それは遠慮した。

「ソファで寝るのは慣れてる」

大貴族としてそれはどうかという発言をあっさりすると、ステラが運んできた掛け布団をかけてゴロリと横になった。美桜にも毛布が2枚掛けられている。これなら風邪もひかないだろう。

「……」

いつもと違う天井を見つめながら、眠れぬ夜を過ごす。

ステラが流した涙の意味を考えていた。「美桜様が仰ってたこと、本当なんです？」と尋ねるステラは、どんな答えを期待していたのだろうか。菖蒲丸はステラの期待とは違う答えを出していたのだろうか。

フェリシア卿が勧める縁談の相手は、やはりフェリシア卿の縁者だった。実子のないフェリシア卿は菖蒲丸と奥方の間の子に家を継がせたいと言う。エイス・サリーフェン家の男女関わらず第二子を養子として迎え入れる考えらしい。

元々、ステラのときからの嫁入り話を「悪くない話だ」と食いついていたのはゼニア・サリーフェン——いわゆるサリーフェン総本家だ。フェリシア卿は大事な客である。客と結びつくのは悪い話ではない。総本家にしてみれば、ステラだろうが、別のフェリシア家の娘だろうが、婚姻を結ぶことに関して諸手を上げて大賛成していた。

——結局、本家もフェリシア卿も、得だけ取ろうとした雑賀のオッサンと同じじゃねエか……
疑問ばかりが膨れ上がる。

カタンと小さな音がしたのはそのときだ。視線をそちらに向けると暗闇の中、ステラがリビングを覗き込んでいるのが見える。

「……何してんだ？」

「！」

こそこそと隠れるステラに菖蒲丸は苦笑する。

「何だよ」

「心配で……。菖蒲丸様のお体に障りますから」

「別に一晩くれエソファに寝たところで——」

「お邸の方々知られたら怒られます……」

「黙ってりゃわかんねエだろうが」

「あ」

「だから、心配すんな」

のそっと起き上がり、菖蒲丸はぼさぼさになった頭を搔いている。

「小せエ電気つける。何か飲むもんくれ」

「はい」

ステラは氷をいくつか入れたグラスに炭酸水を注いで持ってきた。それと一緒にトレーの上には火のついた蝋燭があった。ジャック・オ・ランタンの形をしている。

「これなら、美桜様も眩しくないですから」

「……あア」

菖蒲丸の前に炭酸水を出し、ステラは昔のようにテーブルから少し離れたところに立っている。

「座れよ」

「では、失礼いたします」

菖蒲丸の正面にステラは座り、カボチャの上に点る小さな火を見つめている。

「これ、どこで買った？」

「商店街の雑貨屋さんでもらいました。お皿ですとか、細々したものを揃えるのによく利用させてもらっているのです」

「なるほどなア」

彼女は彼女なりの生活をしているのだ。中央大通りの花屋にいたときの彼女の生活のほとんどすべてを菖蒲丸は知っていた。けれど、こうして離れると彼女の趣味や人柄が如実に見える。着ている服も、揃っている食器類に関しても、だ。

「菖蒲丸様」

「あア」

「先程の話の後、エイナと私、2人で話をしました」

「……あア」

「エイナは喜んでくれました」

「ならよかったじゃねエか」

「はい」

ステラは頷く。

「初めはどうなることかと思いましたがけれど……」

「だろくなア……。殺人鬼だもんなア……」

揺らめく光の中、ステラは微笑む。

「彼の口から、悔悟の言葉を聞きました。いくつも聞きました。ここに来たばかりの頃、すべての覚悟を背負って破壊されることを選んだ彼は、生まれ変わった喜びと、再びの生の戸惑いの中にいました。……私は、彼の傍でそれをすべて見つめてきました。……私が見てきた彼は、とても、弱かった……」

菖蒲丸の視線が上がった。

「夜になると、壊れた日を思い出して震えていました。窓の傍に寄ることも出来なかった。『大丈夫？』と訊いても、『大丈夫』としか答えてくれなくて……。後で、彼からそういう状態だったことを聞きました」

「……」

「私はあのとき彼を抱き締めてあげればよかった。そうすることは出来たはずなのに、私も、彼が怖かったんですね……。後から気付いて、謝ることしか出来なかったんです」

「怖エのは当たり前だ。ステラが気に病むこたアねエ」

「……でも、それから、私は彼の内側に踏み込むのが怖くなりました。どうしていいのかわからなくて、何をしても傷つけてしまうのではないかと……」

「考えすぎだよ～」

「だよね～」

すぐ傍で第三者の声が出た。声の方を見て菖蒲丸とステラは目を丸くする。

毛布に埋もれた状態で起き上がっている美桜の隣で、エイナも座り込んで2人を見つめている。

「……」

「……」

ステラと菖蒲丸は顔を見合わせ、頷き合って立ち上がると、菖蒲丸は美桜の、ステラはエイナの額にデコピンを食らわせる。

「イダ！」

「イテ！」

涙目で蹲る美桜の隣で、エイナはステラを見上げていた。

「痛い～。何すんのさ～」

「……黙って聞いてるなんて、よくないです」

「だって、好きな人が別の男とコソコソ話してるなんて黙ってらんないよ～」

「僕もそう思います。菖蒲丸様、何考えてるんですか。……って、むぎゃ」

ニヤニヤ笑っている美桜を転ばせ、その背を踏みつけた菖蒲丸は「ふん」とそっぽを向いた。

ステラとこうして2人で話すことなど今後ないかもしれない。そう考えれば今、この時間だけでも、彼女と向き合っていたかった。彼女が抱えていた後悔や苦しみを分かち合いたかった。

それなのに、である。

「あ、ランタンキャンドルだ！」

「何でカボチャなんだろうな～。美桜は知ってる？」

「えっとね～。何かね、西洋のお盆みたいなものなんだって」

「へ～。あっちの国はお盆にカボチャ飾るのか～」

「変だね」

「変だな」

美桜とエイナの会話はのんびりである。そして、少しずれている。

「……訂正するのも面倒だ……」

呟く菖蒲丸は頭を掻いてソファにゴロリと横になる。

「おやすみになりますか？」

「まだ起きてる。美桜とエイナの漫才が面白エ」

何か違う話題に移っているが、やはりどこかずれたまま進んでいるようだ。互いに知らないことが多いため、ずれたまま誤解が誤解を生んでいたりしておかしかった。

「ステラ、眠いなら無理に起きてるこたアねエ」

「私も、まだ平気です。電気つけましょうか」

「じゃあ、こいつらが飲むものも持って来いよ。もう少し話でもしようや」

「はい、菖蒲丸様」

今このときを楽しめばいい。

菖蒲丸はまだ続けている噛み合わない美桜とエイナの話を黙って聞いていた。

第5幕 Trick or treat!

10月31日。

「Trick or treat!!」

「うわわわわア！」

家に帰ったエイナを待ち構えていたのは、カボチャのオモチャをかぶり、黒いマントを羽織った美桜だった。玄関ドアに背をぶつける勢いで後ずさり、しばらく美桜と見つめあう。

「……美桜……？」

「うん！」

ばさばさと手を動かしながら美桜は笑っている。カボチャの穴から、笑う美桜の目が見える。「今日はね！ 子供がお菓子をもらって歩いてもいいんだって！ 『お菓子くれなきヤイタズラするぞ！』って脅迫してもいいんだって！ テレビでやってた！」

少々違うが、大筋は間違えていない。美桜の言い草に少々顔が引きつりつつも、「そ、そうか～」と、エイナは頷いている。

「で？ 美桜がここにいるってことは菖蒲丸もいるってことか」

「うん。いるよ」

頷いた美桜は、靴を脱いで家に上がったエイナの周りをうろうろしながら、「お菓子ちょうだい！」と騒いでいる。

そういえば——エイナは思い出した。店を出るとき、マダムがお菓子をくれた。

「お菓子を求める子にあげなさいね」

まるで、今の状況を知っているかのようなタイミングである。だが、行事を考えれば、マダムは状況を読んだというより、時勢を読んだのかもしれない。

「お菓子持ってるから、周りをチョロチョロしない」

「お菓子～！ お菓子～！」

美桜に焼き菓子の包みを手渡し、リビングへ。

「ただいま～」

「おかえりなさい」

微笑むステラに歩み寄って抱き締めると、それを忌々しそうに見つめている菖蒲丸を見てニヤリと笑う。

「菖蒲丸、最近アンタをよく見るなア～」

「休み前に遊びにくることにした」

「……邪魔しに来てるんだろ～」

「まさかまさかそんなまさか」

菖蒲丸は手をパタパタと目の前で振ると、言った。

「結婚することになったってな、報告に来た。まア、こっちに住むから今と変わらねエけどな」

「……そうなんだ」

意外そうな顔をするエイナに、菖蒲丸は口をへの字に曲げる。

「何だよ、その顔」

「別に〜？」

目を逸らすエイナに、美桜はお菓子の包みを開けながら言った。

「僕、この間会ったけど、ステラさんに感じのよく似た——」

「おっと手が滑った」

「イダ——イ！」

美桜の頭の上でっぺんに菖蒲丸の手刀が降る。カボチャ越したが、プラスチックのカボチャが頭が当たったのだろう。美桜は「うぐぐぐ」と唸りながら蹲った。ステラは美桜の頭——カボチャを撫でながら菖蒲丸を見る。

「菖蒲丸様、ダメです！」

「もっと言ってやって！」

美桜の声。ステラは「そうですとも」と大きく頷いて、腰に両手を当てて菖蒲丸を見た。

「もっと優しく叩かないと！」

「そうじゃないし〜ッ！」

半泣きの美桜にキョトンとするステラ。菖蒲丸は笑ってエイナを見た。

「なァ、エイナ」

「ん？」

エイナの視線が菖蒲丸を見る。

「テメエの嫁は強ェなァ」

そう言った菖蒲丸はどこか清々しく見えた。声に出して言ったことで、吹っ切れたのかもしれない。

「ステラさんも結婚式とか挙げたい？」

菖蒲丸たちが帰った後、エイナは隣で編み物をしているステラを抱き締めながら訊く。

「気にしないでください、そういうことは」

「……」

「大体話は決まったので」

「は？」

素っ頓狂な声で疑問を呈する。そんなエイナにステラはくすくす笑っていた。

「菖蒲丸様が手配してくださったんですよ」

「何を?!」

「結婚式です。私と、エイナの」

「……ま、マジ、で……？」

「はい。学院の隅に、小さな礼拝堂があるそうです。古くからあった祠だったそうですが、近年月を祀った礼拝堂として建て直されたそうなんです。そこで式を挙げられるように、ルネちゃんに相談してくれて」

「あの喋る猫？ よく二足歩行で散歩してる？」

「はい。お世話になってるルネちゃんです」

「権力持ってそうだな～」

「実際、かなり偉い方なのですが実際のところはわかりません。でも、『結婚祝いにゃ。我輩、ステラちゃんにウェディングドレスをプレゼントするにゃ！』って言ってくださいましたよ」

「猫が？」

「はい。魔界の結婚式も白のドレスなんです。煌めく月は気高く白い光を私たちに与えてくださいます」

ステラはニコッと微笑んだ。

「魔界（あちら）の都で一番の仕立屋さんに発注してくださるそうです。当然ですけど、エイナも正装するんですよ」

「え～……面倒——」

「見たいです」

「……頑張ります」

ステラの頬に口付け、エイナは苦笑する。

「あ～あ……菖蒲丸とあの猫に借りが山ほど出来てる気がする～……」

「そうですね。……菖蒲丸様に出会えてよかった」

その言葉に一瞬、ムツとしたように口の端を曲げたエイナを振り向きもせず、ステラは続ける。

「だって、エイナと出会えた。私がずっと魔界にいたらあなたには出会えなかった。菖蒲丸様のお邸に行儀見習いに出て、こちらに来て——あなたに会えました」

エイナは顔をステラの首筋に押し当て、沈黙した。

「……生まれ変わったあなたと、もう一度出会えてよかった……」

エイナの腕に力が籠る。ステラは編みかけの肩掛けを膝の上に置き、エイナの腕にそっと手を添えた。

「ずっと、一緒です」

「うん……ずっと一緒だよ」

互いのぬくもりを感じつつ目を閉じる今、本当に幸せを噛み締める。

蛇足。

「Trick or Treat!」

「え？」

冷蔵庫から炭酸水を取り出していたエイナは、キッチンを覗くステラを見る。

「美桜にも言われた」

「お菓子をくれなきゃイタズラしてもいいって、菖蒲丸様が仰ってました。」

「炭酸だけは振らないでエ～！」

なぜか非常に不服そうな顔をしたステラに恐怖を覚える。

「頼むから、炭酸は——！」

「お菓子ないんです？」

問われ、エイナは「それならね～」と食器棚からグラスを取り出しながら答えた。

「美桜に全部食われたよ」

少々傷付いたような顔をして顔を引っ込めたステラの小さな呟きが遠ざかっていく。

「……美桜様宛てに……今度、辛子入りのトリュフを作ろうかしら……」

「……」

引きつり笑いを浮かべつつ、エイナはグラスに炭酸を注いだ。

「怖ア～……」

あとがき

こんにちは。紫桐子です。

この物語は『Talk Me Parallel-The Reason why You're There』（略称・TMP-TRY）という同人ゲームの後日談です。ゲーム開始のちょうど1年後くらいの話となっております。

ゲーム本編をご存じないと、さっぱり中身がわからないという、大変不自由な小説で申し訳ない限りです。

UnderWater LotuS名義でいくつかリリースさせていただいているゲームですが、二通りの世界があります。

いわゆる、『Talk Me Series』（略称・TMS）という通常ナンバリングの現代世界と、『Talk Me Parallel』（略称・TMP）という現代だけれどもファンタジー要素で味付けされた世界です。

『TMS』はゲームごとに舞台が違ったりするのですが、『TMP』は一貫して架空の地方都市、蓮花市が舞台となっています。

蓮花市は不思議な街です。一地方都市だというのに、警備は厳重。特警局は特に優秀なのがぞろりと揃い、中には魔力暴走を起こした魔法使いと一対一のガチバトルをしても死なないくらい頑丈な者もいます。

怪しい花屋。やたらと大きな魔法学院。魔法学院の生徒たちから『謎の邸』と呼ばれる和洋折衷の大きな邸。他に例を見ないほど大きな魔界人特別居住区などなど。

本当は薬王堂の怪しい店主さんも絡ませたかったんですが、これは次回の『TMP』にでも絡ませられたらと思います。

主要人物は違えど、そこに絡む人々は皆、何か抱えて個性的。——そんな蓮花の物語が今後も作れたらと思います。

最後まで読んでいただきありがとうございました。

2010年10月31日 紫 桐子